博士論文（要約）

論文題目　　18世紀における中国とヨーロッパの思想交流――
在華イエズス会士アミオの報告を中心に

氏　　名　　新居　洋子

目次

付記・・２

序論・・３

第一章　孔子像の創造と典礼論争・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・６

第二章　中国音楽における科学（science）の発見・・・・・・・・・・・・・・・・・８

第三章　メスメリズムと陰陽理論の邂逅・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１０

第四章　清朝の政治運営における公（public）の発見・・・・・・・・・・・・・・・１２

第五章　文芸共和国における普遍語としての満洲語・・・・・・・・・・・・・・・・１４

第六章　清朝出版事業とアミオの中国史叙述・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１６

結論・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１８

参考文献一覧・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・２０

論文の内容の要旨・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・４０

博士論文（要約）本文

付記

本論文の内容は、以下の各章に該当する内容が、既に雑誌論文などの形で出版済みであるか、もしくは近日刊行されることが決定している。以下にその書誌情報を示す。

第二章

新居洋子「十八世紀におけるイエズス会士アミオと中国音楽」、『中国――社会と文化』第 22 号、2007 年、131～147 頁。

Nii Yoko, “The Jesuit Jean- Joseph-Marie Amiot and Chinese Music in the Eighteenth Century”, Luis Saraiva (ed.), *History of Mathematical Sciences: Portugal and East Asia IV: Europe and China: Science and the Arts in the 17th and 18th Centuries*, Singapore: World Scientific, 2012, pp. 81-92.

第三章

新居洋子「メスメリズムと陰陽理論の邂逅」、『中国哲学研究』第 28 号、2015 年 3 月刊行予定。

第四章

新居洋子「イエズス会士アミオのみた乾隆帝と清朝官僚」、『中国――社会と文化』第 26 号、2011 年、107～123 頁。

第五章

新居洋子「18 世紀在華イエズス会士アミオと満洲語」、『東洋学報』第 93 巻第 1 号、2011 年、88～64 頁。

第六章

新居洋子「一八世紀後半の在華イエズス会士による中国史叙述」、『東方学』第 129 輯、2015 年 1 月刊行予定。

新居洋子「在華イエズス会士による中国史叙述」、川原秀城編著『西学東漸と東アジア』東京：岩波書店、2015 年 2 月刊行予定。

序論

ヨーロッパでは、遅くとも紀元前 4〜5 世紀には、自らとは異なる世界としてのアジアに対する認識が流通していたのみならず、中国に関する知識も存在したといわれる。この時点における中国像とは、幻想の多く織り交ざったものだったが、それから二千年以上経過した 19 世紀に入り、中国に対する関心は一つの学科、すなわち中国学（Sinologie）として結実するに至る。この時期のラングレ（Louis-Mathieu Langlès）やレミュザ（Abel Rémusat）を始めとする学者たちは、漢語や満洲語の高度な能力を獲得し、豊富な中国文献を利用しながら、中国の思想、言語、歴史、政治体制などに関する多角的、体系的研究を進めた。

但しヨーロッパにおける中国学は、19 世紀に突然確立したわけではない。中国に対する関心を醸成するだけでなく、中国に対する関心と研究のあり方を大きく転換させる役割を果たしたのは、16〜18 世紀に中国で活動したイエズス会士（以下、在華イエズス会士と呼ぶ）である。1773 年に教皇クレメンス 14 世がイエズス会の廃止を宣言し、1775 年に廃止命令が正式に在華イエズス会士に及び、この最後の世代の在華イエズス会士が死亡する 19 世紀初めまで、彼らの活動は継続した。歴代の在華イエズス会士は、16 世紀末に巡察師ヴァリニャーノ（Alessandro Valignano）が打ち出した適応政策のもと、精力的に中国研究を進め、その成果をヨーロッパへ送り続けた。

著名な中国―ヨーロッパ間交流史研究者マンジェロ（David E. Mungello）は、特に 17 世紀の在華イエズス会士が、ヨーロッパにおける「原基的中国学（proto-sinology）」の誕生と発展を促し、ヨーロッパ人が中国を漠然と世界の果てにある半ば幻想上の存在として思い描くことに飽き足らず、練り上げられた手法を伴う精密な探究の対象としての国＝curious land として捉える契機を生み出した、とする。またレミュザは、18 世紀前半の在華イエズス会士こそ、従来の在華イエズス会士による中国研究に「科学の輝き（éclat scientifique）」を与え、「大衆と知識人の注目を中国に引き付け」、「中国の文芸がヨーロッパで初めての成功を収め」るための大きな役割を果たしたと評価する。

諸先行研究においても、リッチ（Matteo Ricci）ら最初期の在華イエズス会士の他、マルティニ（Martino Martini）やル・コント（Louis le Comte）、『中国の哲学者孔子（*Confucius Sinarum Philosophus*）』（1687）の共同執筆者たちを代表とする 17 世紀のイエズス会士、そしてブーヴェ（Joachim Bouvet）、プレマール（Joseph Henri Marie de Prémare）、ドゥ・マイヤ（Anne Marie de Moyriac de Mailla）、ゴービル（Antoine Gaubil）を代表とする 18 世紀前半の在華イエズス

会士に関する研究が圧倒的多数を占める。これに対し最後の世代、すなわち 18 世紀後半の在華イエズス会士は、従来ほとんど注目されてこなかった。この問題点の多くは、先行研究における大きな傾向、すなわち 17 世紀ヨーロッパにおける「原基的中国学」の萌芽から、19 世紀における正式な中国学の完成に至る過程を直線的な過程として捉え、この間一貫して中国研究を牽引した在華イエズス会士における多元性や、世代ごとの差異をほとんど無視していることに起因すると思われる。

しかし 18 世紀後半の在華イエズス会士は、前の世代に劣らず精力的に中国研究を展開している。18 世紀半ば、中国人キリスト教信者のガオ（姓名の漢文表記は不明, 欧文史料には Louis Gao 又は Aloys Ko と表記）とヤン（姓名の漢文表記は不明, 欧文史料には Étienne Yang と表記）の渡仏と帰国をきっかけに、当時北京四堂のうち北堂＝西安門内蚕池口内天主堂に居住していたフランス出身の在華イエズス会士と、フランス国務卿ベルタン（Henri-Léonard Jean Baptiste Bertin）との間に、中国に関する情報をやり取りするための文通が開始され、18 世紀末まで続いた。

この文通を通してヨーロッパへ送られた報告のうち、重要なものはベルタンの指揮のもと、編纂、出版された。これが『中国の歴史、科学、技芸、風俗、慣習などに関するメモワール（*Mémoires concernant l'histoire, les sciences, les arts, les mœurs, les usages, &c. des Chinois*）』全 16 巻（1776-1814）である。以上のガオとヤンの渡仏、およびベルタンらフランス高官との交流については、後藤末雄およびドエルニュ（Joseph Dehergne）の各研究に詳しい。こうして『メモワール』はヨーロッパ知識人の間に広く流通し、彼らの中国に関する著述の情報源、引用元となった。

『メモワール』を前の世代、すなわち 18 世紀前半の在華イエズス会士による報告を集めた、著名な『イエズス会宣教師による、外国宣教について書かれた啓発的で好奇心をそそられる書簡集（*Lettres édifiantes et curieuses, écrites des missions étrangères par quelques Missionnaires de la Compagnie de Jesus*）』全 34 巻（1702-1776）と比較すると、両者の間には興味深い差異が認められる。『書簡集』は、世界各地に赴いた（主にフランス出身の）イエズス会宣教師の手紙を集め、フランスで編纂、出版された。『メモワール』が出現する以前、啓蒙思想家を含むヨーロッパ知識人にとって、中国に関する最も重要な情報源の一つが『書簡集』だった。

『書簡集』は、在華イエズス会士とフォントネル（Bernard le Bovier de Fontenelle）やドゥ・メーラン（Jean Jacques Dortous de Mairan）らアカデミー人士との文通を多く含み、18 世紀

前半の在華イエズス会士が、同時代ヨーロッパの先端的な思想や科学技術と接触していたことが窺える。しかし『書簡集』の大部分は、ヨーロッパにおけるイエズス会関係者に宛てた、カトリック宣教に関する内容で占められている。これに対し、『書簡集』の後を継いだ『メモワール』は、宣教に関する内容をほとんど含まない。フランス国立図書館（Bibliothèque nationale de France）などに蔵された報告の手稿と出版物を比較すると、手稿自体が宣教に関する内容を含まない場合と、手稿が編纂を経て出版へと向かう過程で、カトリック宣教に関する内容が削除される場合の両方が認められる。その背景には、在華イエズス会士の主な文通相手で『メモワール』の編纂と出版を手掛けたベルタンの意向、さらに間接的には『メモワール』が流通した諸アカデミーにおける、神学的議論を避ける傾向があったと推測される。

上記の如く、18 世紀後半の在華イエズス会士の中国研究を取り巻く背景は、前の世代と大きく異なっていたと考えられ、その内容と背景、独自性について明らかにすることは、ヨーロッパにおける中国学の展開を考える上で不可欠の作業といえる。

先行研究が抱えるもう一つの大きな問題点として、ヨーロッパ側史料を主とし、在華イエズス会士が中国研究のため選択、参照した漢文および満文の中国文献については検討していないことが挙げられる。これは特にピノ（Virgile Pinot）やガイ（Basil Guy）を嚆矢とする、フランス文学を主とする研究者の著作に顕著な傾向である。彼らの主な論点は、中国に関する報告がヨーロッパに伝わった後、いかに啓蒙思想家などヨーロッパ知識人の思想の変遷に関わったかという問題にあるが、そもそもヨーロッパに伝わった報告（大半が在華イエズス会士の手による）がいかなる情報源、すなわち中国文献を典拠とし、それらの情報源と比較してどの程度忠実に、あるいは逸脱して翻訳、作成されたのか、という基本的な点に触れていない。しかし、当時のヨーロッパ知識人のほとんどは中国文献を原語で読解する能力を持たず、在華イエズス会士による報告に依拠せざるを得なかったため、在華イエズス会士による中国文献の選択および翻訳の性質は、当然ながらヨーロッパ知識人による中国理解に根本的な影響を与えたはずである。

さらに、在華イエズス会士は、同時代中国における思想の変遷から絶えず様々な作用を受けており、こうした作用が中国文献の選択と翻訳の仕方に反映されたとすれば、間接的にせよ、ヨーロッパにおける中国理解のあり方そのものが、同時代中国思想によって方向付けられた可能性も開かれる。

上記の状況を踏まえ、本論文では、18 世紀後半の在華イエズス会士に光をあて、彼らと

同時代中国ならびにヨーロッパの各思潮との関わりが、いかにその中国研究に従来との連続と断続の両面をもたらしたのか、明らかにしようと試みた。そのために主な研究対象として、18 世紀後半の在華イエズス会士のうち、中国に関する最も膨大な報告をヨーロッパへ送ったアミオ（Jean-Joseph-Marie Amiot）を取り上げた。

アミオの経歴については、ロシュモンテクス（Camille de Rochemonteix）の著作において整理された後、ダヴァン（Emmanuel Davin）、また最近になってエルマン（Michel Hermans）の論文によって補われた。但しこれらはいずれも、ヨーロッパ側の史料に依拠して書かれており、本論文では中国側の史料を補いつつ、アミオの経歴を整理した。アミオは 1718 年にフランスのトゥーロンで生まれた。フランス各地のイエズス会修練院やコレージュにて学業を積んだ後、海外宣教を志望し、1749 年に中国へ向けて出発し、1750 年にマカオに到着した。その際、アミオらを清朝宮廷に迎え入れることを請願する上奏文が、当時乾隆帝の宮廷画家として仕えていた、イタリア出身の在華イエズス会士カスティリオーネ（Giuseppe Castiglione）から提出されている（乾隆 15 年 11 月 18 日）。当該の上奏文には、アミオ（中国名は銭徳明）が「律呂〔音楽〕に通暁する」ことがうたわれ、彼が当初は音楽の技能によって推挙されたことを示している。但し結局、アミオは内閣蒙古堂繙訳としてラテン語（・ロシア語）－満洲語（・漢語）間の翻訳に従事することになったようである。その一方で、前述の如く中国研究を精力的に展開し、膨大な報告をヨーロッパへ送っている。

本論文では、基礎作業として、アミオが報告作成の際に選択、参照した中国文献（漢語と満洲語の両方を含む）を調査し、それらの中国文献とアミオの報告との比較対照を通じて、アミオの報告が中国におけるいかなる思想を反映しているのか、分析した。さらに中国文献から逸脱した記述、すなわちアミオ独自の思想が提示されたと思われる記述を確定し、歴代の在華イエズス会士および同時代ヨーロッパ知識人による著作と比較し、その歴史的背景と独自性について検討を行った。

第一章　孔子像の創造と典礼論争

16 世紀末に初めて中国に入り、活動を開始した在華イエズス会士が、適応政策を宣教活動の基本方針としたことはよく知られている。適応政策とは、古来中国における支配層および知識人の思想と行動を規定してきた儒教を、キリスト教と調和可能なものとみなし、儒教の権威を利用して宣教を進めようとするものである。こうした政策のもと、在華イエ

ズス会士は、儒教について研究を重ね、その成果を中国宣教に生かすだけでなく、ヨーロッパへ送り続けた。これらの報告は、ヨーロッパ知識人の間においても大きな関心を呼び起こした。特にそのきっかけとなったのは 17 世紀の在華イエズス会士が共同執筆し、『孟子』を除く四書のラテン語訳を主とする『中国の哲学者孔子』（1687）である。マンジェロ、メイナード（Thierry Meynard）、井川義次らの研究によれば、『中国の哲学者孔子』は主に明の張居正による経書『直解』シリーズに依拠して書かれ、多分に宋学を反映した内容となっている。そもそも『中国の哲学者孔子』が儒教の概説を企図しつつ、内容的には四書の翻訳を主体とすること自体、宋学的態度の表れといえよう。五経がヨーロッパ諸語に訳されたのは 19 世紀以降のことである。『中国の哲学者孔子』は、儒教＝孔子の教えとし、孔子＝儒教の開祖とする認識を根付かせた。

このように『中国の哲学者孔子』が描き出した孔子像は、17 世紀末以降、ヨーロッパで大きな影響力を持った。本章における大きな問題意識は、このように『中国の哲学者孔子』が確立した孔子像が流通する中で、18 世紀後半にアミオが著した『孔子、すなわち俗にコンフュシュス〔孔夫子〕と呼ばれ、中国の哲学者の中で最も名高く、古代の教えの復興者である人物の生涯（*La vie de Koung-tsee, appellé vulgairement Confucius, le plus célébre d' entre les philosophes chinois, et restaurateur de l' ancienne doctrine*, 以下『孔子伝』）』がいかなる独自性を持ち、そのことがどのような歴史的意味を持つのかという点にある。これまで『孔子伝』全体および細部に関する歴史的分析といえる先行研究は現れていない。

『孔子伝』は 1784 年にヨーロッパへ送られ、1786 年発行の『メモワール』第 12 巻に収録された。『中国の哲学者孔子』も簡略な孔子の伝記を含むとはいえ、『孔子伝』はその全体が孔子の誕生から死までの詳細な言行録となっており、ヨーロッパで初めての本格的な孔子の伝記といえる。この点において『孔子伝』が歴史的重要性を持つのは当然だが、本章ではより深くその内容を分析し、そこに現れた孔子像を掘り起こす作業を通して、『孔子伝』の独自性を検討した。

18 世紀前半、『中国の哲学者孔子』を主な情報源とする様々な著作が、ヨーロッパ知識人によって生まれた。儒教の伝統的な祭天儀礼や祖先祭祀に関する内容を多く含むという性質上、これらの著作の執筆および流通は、17 世紀末以降激化しつつあった典礼論争と密接に絡み合いながら展開した。リッチら最初期の在華イエズス会士によって打ち立てられた、儒教経書における「天」や「上帝」を「天主」＝カトリックの神と同一とみなす方針は、典礼論争のなかでパリ大学神学部と教皇によって否定され、こうした内容を含むとみ

なされた書物も批判の対象となった。またこうした批判を回避すべく、世俗的、道徳的側面が強調された孔子像が創造され、流通するに至った。

以上の状況を踏まえた時、典礼論争が沈静に向かうなかで現れたアミオ『孔子伝』は、次の如き歴史的意義を持つといえる。『孔子伝』は、『孔子聖蹟図』や『聖門礼楽統』を始めとする明清代中国で出版された孔子関係著述を主な典拠とし、それらをほぼ忠実に翻訳する一方で、一部に『孔子聖蹟図』や『聖門礼楽統』に拠らず、『孔子家語』に基づくと思われる部分を集中的に含む。しかもこの『孔子家語』に基づく部分は、原文から大きく逸脱した解釈をも度々含むという点で、全体のなかで明らかに異質である。この部分にこそ、まさに祭天儀礼や祖先祭祀をめぐる議論が含まれている。そこに見られる、祭天儀礼が犠牲奉献を伴う、唯一かつ最も重要な祭祀だという主張、「天」と「上帝」を暗にキリスト教の神になぞらえた解釈は、典礼論争によって否定された最初期の在華イエズス会士の方針を、再び掲げたものと捉えることができる。

第二章　中国音楽における科学（science）の発見

16～18 世紀における中国・ヨーロッパ間の交流において、音楽は比較的重要な領域であった。例えばリッチは、明の万暦帝にヨーロッパの楽器を献上し、ヨーロッパへの報告で中国の様々な音楽に関する所感を述べている。また清朝においては、イタリア出身のラザリスト会宣教師ペドリニ（Teodorico Pedrini）は、康熙帝の命によって宮廷音楽教師を務めた他、西洋音楽の理論を、初めて本格的に中国人向けに解説した『律呂纂要』、『律呂正義続編』も編纂された。その一方で、18 世紀後半には、中国の音楽をヨーロッパへ向けて紹介する著作も現れた。本章で取り上げたのは、その代表的著作、すなわちアミオの『古代および近代の中国音楽に関するメモワール（*Mémoire sur la musique des chinois, tant anciens que modernes*）』である。

『中国音楽に関するメモワール』に関する先行研究の中で、最も先駆的かつ重要なのは、チェン（Ysia Tchen）の著作である。チェンは、アミオが音楽に関する中国の古典籍を扱う際、こうした古典籍における「曖昧ではっきりしない、時に荒唐無稽な議論」が、それらについて「科学的（scientifique）で正確な提要を作成することを、非常に困難にしている」とし、アミオが大きな紙幅を割いて説明した、卦や河図洛書と音律の結びつきについて、ほぼ無視している。しかし、こうした卦や河図洛書と音律の結びつきは、アミオ報告において見過ごすことのできない部分を成すだけでなく、18 世紀フランス人のアミオにとって

これらは、「科学（science）」に深く関わるものだったと考えられる。本章ではこの点を中心に検討した。

アミオは、18 世紀フランスの音楽理論家ルーシェ（Pierre Joseph Roussier）がとなえた、中国の音楽システムがエジプトに由来するという説に対し、中国音楽がエジプトやギリシアのものより起源が古く、独自に完成されたものだという反論を展開している。こうした論争の背景には、古代文明に普遍性を見出し、文明の起源に遡ろうとする欲求が 17〜18 世紀ヨーロッパ知識人の間で高まったこと、さらにその起源をエジプトに見出そうとする傾向の顕在化がある。いわゆるエジプト人中国植民説も、この思潮と密接に絡み合いつつ流行した。

しかしアミオの議論は、中国音楽の起源の古さを主張するのみに止まらない。アミオは、このように遥か古代に確立された中国音楽において、万物を支配する「宇宙の調和」の発見へと導く「科学（science）」が見出されることを証明しようと試みた。アミオをこうした試みへと方向付けたのは、18 世紀当時のヨーロッパ知識人たちが科学、特に思弁的な科学（sciences spéculatives）が中国で進歩をみたか否かという問題に対し、しばしば否定的な見方を表明していたからだと思われる。この見方は、在華イエズス会士が過度に中国を理想化しているという、やはり当時広く見られた批判と密接に結び付きつつ、自然誌学者ソヌラ（Pierre Sonnerat）らによって示された。

さらに、上記の見方の背景には、当時のヨーロッパにおける新しい科学をめぐる様々な探究があった。音楽に関しては、ラモー（Jean Philippe Rameau）がその著書『自然の原理に還元された和声論（*Traité de l' harmonie, reduite à ses principes naturels*）』などにおいて、数学的原理に基づく和声理論を確立し、根音バス（basse fondamentale）の理論を生み出したことが、科学の発見として称賛された。

アミオが中国音楽に見出そうとしたのは、まさに上記の如く当時ヨーロッパ知識人たちの関心の焦点にあった「科学（science）」である。アミオは、古来中国で音律生成と結び付けられてきた卦、およびそれが象徴する所の陰陽二気の相互生成理論に科学を見出し、これをラモー、および彼を含む同時代ヨーロッパ人が発明した諸科学の原型として、ヨーロッパ知識人の眼前に示そうと試みたといえる。

アミオは、中国音楽に関する報告を作る際、主に朱載堉『楽律全書』に依拠した。『楽律全書』はその名の如く、音楽理論を総合的に解説した書物であり、明代中国を代表する音楽書であるだけでなく、十二平均律の理論を打ち立て、明・清代中国における音楽理論

研究の主な拠り所となった。中国音楽に科学を見出し、中国における科学の進歩を証明しようとするアミオの試みは、朱載堉による新しい音楽理論の確立、およびその普及という同時代中国における思潮と深く関わっていたものと考えられる。

第三章　メスメリズムと陰陽理論の邂逅

18 世紀ヨーロッパにおける先端的な科学と、中国の陰陽理論を結び付ける試みは、アミオの別の報告にも見られる。第三章では、メスメリズムと陰陽理論の関わりを主題とするアミオの報告を取り上げた。

特に宋学的な形での陰陽理論は、アミオに先行する在華イエズス会士にとっては概ね障壁として立ちはだかった。序論で述べた如く、在華イエズス会士は入華以来適応政策を採ったが、知性を備えた人格神を万物生成の根元とするキリスト教の宇宙観を、太極や理によって万物が生成変化するという理論に「適応」させることには、相当の困難があったようである。

これに対し、アミオが 18 世紀末にヨーロッパへ送った幾つかの報告は、従来のヨーロッパ知識人および在華イエズス会士による陰陽理論理解の歴史に、大きな変化を付け加えている。その大きな契機として働いたのは、メスメリズム（mesmérisme）という、18 世紀末ヨーロッパに大きな反響を巻き起こした科学（あるいは擬似科学）との出会いである。メスメリズムとは、ドイツ出身の医師メスマー（Franz Anton Mesmer）が創始し、ウィーンやパリで実践に移された治療法で、「流体（fluide）」と「動物磁気（magnétisme animal）」という鍵概念を中心として構成される。アミオは、メスメリズムの支持者らから、メスメリズムの有効性の証明に役立つ情報について中国で調査することを求められた。

アミオがまず注目したのは、中国における伝統的な治療、養生の術である。アミオは自分が実際目にした、道教における功夫（もしくは工夫）や、剃頭匠による按摩の様子について報告し、また唐初の道士で医者の孫思邈（581-682）が行ったとされる「懸糸診脈」の伝説を紹介した。とりわけ功夫や剃頭匠による実践に対しては、従来の在華イエズス会士（入華初期のアミオ自身を含む）は「シャルラタン的言動（charlatanerie）」や「タバラン（Tabarinage）」と呼び、真正な「医者」ではないという侮蔑を込めて触れるのみだった。これに対しアミオは、メスメリズムとの出会いを経たことで、上記の中国における治療、養生の術とメスメリズムとの共通性を見出すことに取り組み、陰陽の気の均衡を回復するという中国の伝統的な治療、養生の理念を、動物磁気の作用によって神経内に流体の干満を

生み出し、乱れた均衡を回復させるというメスメリズムの理念に重ね合わせる形で説明している。

アミオはさらに、如上の様々な治療、養生の術の理念的核心である、陰陽理論へと議論を進める。アミオは陰陽や太極といった概念を「動物磁気」や「流体」といったメスメリズム特有の概念を用いて翻訳することで、陰陽理論とメスメリズムの間に対応関係があり、陰陽理論に照らしてメスメリズムが有効であることを証明しようと試みている。但しアミオの探究は、ただ単に陰陽理論とメスメリズムの対応関係を示すことに止まらない。両者の対応関係を説明するなかで、アミオはスコラ哲学、あるいはニュートン科学にも頻繁に言及し、そうしたいわば雑多な、別の言い方をすれば非常に 18 世紀末的な知識の総体に陰陽理論を接続しようとしたといえる。

リッチやロンゴバルドら 17 世紀の在華イエズス会士は、中国の太極や理、陰陽の概念をカトリックの万物生成観とは全く関わりの無いものとして捉え、特に太極や理に対しては概ね否定的な見解をとった。これと全く異なり、18 世紀前半の在華イエズス会士、および当時中国思想研究者としてもヨーロッパを代表する存在だったライプニッツは、太極や理、陰陽を神そのものとして捉えた。

以上の解釈と比較した場合、アミオの陰陽理論理解には、以下の如き独自性が認められる。アミオは、太極や理、陰陽の各概念に対し「有形だが不可視の作用因」、「物質的原理」、「純粋に物質的な作用因」などといった解釈を加えており、あくまで自然界に属する有形の物質として捉えたといえる。さらにスコラ哲学の枠組みを利用した点において、アミオの理解は 17 世紀の在華イエズス会士たちと近いともいえる。

但しアミオは、太極を「創造者が存在させておく限り、創造された空間全体を占める」、また「至高存在（Être suprême）に従い、それ〔至高存在〕から最初の推進力を与えられる」とも述べている。すなわちここでは、17 世紀の在華イエズス会士の如く太極などがカトリックの万物生成観と切り離されるのではなく、むしろ太極を頂点とする陰陽理論をカトリックの神と接続してみせているのである。

またその一方で、アミオは陰陽理論とメスメリズムの対応関係を示し、さらにニュートン科学から諸概念を借用することによって、陰陽理論とこれらの新しい科学（あるいは疑似科学）をも接続している。すなわちアミオの独自性とは、もはや従来の如く中国の陰陽理論がカトリックの教義と調和可能か否かという地点に議論を止めるのではなく、陰陽理論がいかに科学として有効か、すなわちいかに自然界の解明に寄与し得るかという次元に

焦点を移した点にある。

第四章　清朝の政治運営における公（public）の発見

第四章では、清朝の政治運営に関する報告について検討した。アミオは、同時代中国で定期的に発行された官報である邸報に基づき、乾隆帝および清朝官僚による日々の政務について、多くの報告を残した。

アミオの報告においてまず特徴的なのは、乾隆帝の三つの顔、すなわち国家として最も重要な祭天儀礼の主宰者としての顔、人民の父としての顔、そして文と武の両方の領域における指導者としての顔について、詳細に伝えた点である。祭天儀礼の主宰者としての乾隆帝について、アミオは「神官長（Grand-Prêtre）」、「供物を捧げる大祭司（Souverain Sacrificateur）」、「信仰指導者（Chef de la Religion）」といった用語で表現している。18 世紀後半のヨーロッパ人の知識において、これらは主に古代ユダヤの神権政治における大祭司職の性質を表した。

アミオが上記の用語を選択した背景には、第二章でも触れたエジプト人中国植民説の流行がある。アミオは、別の報告『諸遺物によって証明される中国の古さ（*l'Antiquité des Chinois, prouvée par les monumens*）』で、中国人は古代エジプト人の植民ではなく、直接ノアの子孫に由来するのであり、伏羲氏はノアの子孫から「天、すなわち上帝、すなわち神」の教えを受け継ぎ、「供物を捧げる大祭司（grand Sacrificateur de la Nation）」としての権限をもって上帝に対する祭祀を行うことを始めた、と述べている 。以上の言説も考え併せると、乾隆帝に対し古代ユダヤの大祭司を主に表す諸呼称を用いることは、中国人がノアの子孫を媒介とする原始キリスト教の正統な継承者であり、真正な神についての教えが現在も保存されているという主張として、受け取ることができよう。

また第一章で明らかにした如く、中国皇帝による祭天儀礼を、物質としての蒼天ではなく不可視の創造者を崇拝するための祭祀とする主張が『孔子伝』に隠されていたことを考え合わせると、清朝皇帝における、祭天儀礼の主宰者としての側面を強調するアミオの態度には、やはり儒教の「天」や「上帝」＝「天主」とする最初期の在華イエズス会士の方針への回帰が認められる。

乾隆帝の人民の父としての側面については、アミオは元の中国文献には含まれない「朕は皆の共通の父である」や、「〔民は〕朕にとっては同じ赤子である」といった文言を翻訳に付加することで、強調している。また文武の両領域における指導者としての側面につい

ては、殿試における試験官としての乾隆帝の振舞いについて触れ、その重要性は清朝皇帝の「神官長」としての側面、人民の父としての側面に劣らず、こうした「教義指導者（Maître de la Doctrine）」としての姿をも備えることによって、はじめて「天子」として十全たり得ると述べている。さらに、如上の文の領域の指導者としての側面を「漢人君主を特徴づける」ものとすると共に、旗人の騎射能力の向上策などに現れた武の領域の指導者としての側面を「満人君主を特徴づける」ものと表現している。

アミオによる、如上の乾隆帝の表象に関しては、王がしばしば人民の父として、あるいは戦士貴族の指導者として表象されてきた、フランスにおける伝統が作用を及ぼした可能性が考えられる。また中国皇帝による祭天儀礼の主宰や、人民に対する父として示す慈愛や譴責については、17 世紀以来様々な在華イエズス会士がヨーロッパへ伝えており、アミオの報告は概ねこうした従来の中国皇帝観を継承しつつ、より詳細にしたものといえる。

但しアミオは、中国における政治運営について、専ら皇帝の振舞いのみを通してのみ描くのではなく、阿桂ら清朝官僚による政治参与についても膨大な報告を残した点で、従来の在華イエズス会士と大きく異なる。例えば乾隆 48 年における体仁閣の火事の際、留京治事として処理にあたった阿桂の振舞いについて、元の中国文献には含まれない文言を多く付け加えながら詳述しており、アミオによる阿桂像はほとんど英雄的とすらいえる。

さらにアミオは、皇帝と軍機大臣らとから構成される、政治的最終決定機関について繰り返し取り上げ、これについて皇帝が最終裁決に至るまでに必ず様々な官僚の意見を聞き、特に「公共善（bien public）」をもたらす意見には従う、と表現する。これ以外にも、清朝の政治運営に関するアミオの報告には、「公（public）」の語が散見される。興味深いのは、これらの「公共善（bien public）」や「公（public）」に該当する語が元の中国文献に見られず、明らかにアミオが独自に付加したと思われる点である。こうした翻訳上の操作を通して、アミオは清朝の政治運営が皇帝の独断専行によるものではなく、皇帝と官僚が協同して推進しており、さらに政治上の様々な判断が「公」であるか否かという基準に照らして下される、という印象をヨーロッパの読者に対して与えようと企図したものと捉えられる。

以上の如く、アミオは基本的には邸報に依拠しつつ、そこから逸脱した文言を翻訳の様々な個所に付加することによって、如上の清朝政治像を練り上げた。そこに現れたアミオの態度は、まず彼が官報である邸報を用いたことにより、かなりの程度清朝を肯定的に捉えるべく方向づけられたと思われる。さらに重要なのは、アミオの議論の背景に、当時のヨーロッパにおいて中国政治を専制的なものとする見方が優勢を占めていたことである。こ

うした見方は、第二章でも登場したソヌラによって発表され、それがカントを始めとする当時のヨーロッパ知識人の中国観に大きな影響を与えたとされる。さらにフランス革命前における公衆、公論そして公共性をめぐる議論の活発化も、アミオの報告に少なからぬ影響を与えたものと考えられる。

第五章　文芸共和国における普遍語としての満洲語

第五章では、『御製盛京賦』のフランス語訳、『タタール満洲語の文法（*Grammaire Tartare-Mantchou*）」』そして『タタール満洲語・フランス語辞典（*Dictionnaire Tartare-Mantchou-François*）』全三巻を中心に、清朝特有の公用語として機能した満洲語に対するアミオの見方について論じた。

清朝入関以降、宮廷に仕える在華イエズス会士は満洲語の修得に努め、清朝皇帝に対するヨーロッパ科学の進講を満洲語で行い、『通鑑綱目』等の漢籍を満洲語版に基づいて翻訳し、その原典と共にヨーロッパへ送るなど、満洲語に日常的に触れていた。しかし 17～18 世紀前半の在華イエズス会士は、満洲語を漢語、そしてヨーロッパ諸語と同等に研究の価値がある言語として示すことはなかった。ヨーロッパの人々に対し、初めて満洲語をヨーロッパ諸語と同等の精密さを持つ言語とし、学習や研究すべき対象として明確に提示したのは、アミオである。アミオは満洲語の文法を、18 世紀当時ヨーロッパにおいて普遍語の地位を占めていたフランス語に擬して説明するだけでなく、フランス語と同等に「明晰な（clair）」言語として提示した。

このようにアミオが、満洲語を精密かつ「明晰な」言語として描き出そうと努めた背景には、18 世紀後半の中国における様々な満洲語関係書物の編纂という状況があった。まず、アミオが満仏辞書を編むにあたって最も多く参照したと思われるのは、李延基による満漢辞書『清文彙書』だが、従来の辞書が基本的に一つの見出し語に対し一つの訳語をあてているのとは異なり、見出し語に対しかなり説明的な解説を付している。こうした辞書がほぼ同時代に出版されたことにより、アミオは満洲語の語彙をより精密に、明確に把握する手掛かりを与えられた。

さらに重要なのは、乾隆帝の下で進められていた満洲語改革、そしてその集大成としての『御製増訂清文鑑』（1771）編纂事業である。アミオは、この事業によって「我々がヨーロッパで有している言語と同じく完全な言語を持つことになる」と述べている。このようにまさに同時代中国で進行中の、王朝による満洲語改革事業は、満洲語を研究の価値ある

対象とし、フランス語を始めとするヨーロッパ諸語と同等に精密かつ明晰な、「完全な」言語としてヨーロッパ知識人に提示しようとするアミオの試みを、強く促したものと考えられる。

こうした態度は、17 世紀の在華イエズス会士フェルビースト（Ferdinand Verbiest）が、満洲語の文法をヨーロッパに向けて説明する際、ラテン語とカトリック教会及び教皇の普遍性への賛美でもって締め括ったのとは対照的である。フェルビーストの世代にとって、普遍語の位置を占め得るのは唯一ラテン語であり、ラテン語を普遍語とするカトリック世界こそが唯一の普遍性を体現したといえる。

これに対し、アミオは満洲語を普遍語とする世界を、ヨーロッパにおける「文芸共和国（république des Lettres）」と連結しようと試みている。アミオが満洲語の研究を勧めたのは、ヨーロッパの「文芸共和国」に対してであった。また清朝における漢籍の満洲語への翻訳事業に関して、アミオはそれが「アカデミー」によって慎重に執り行われていると述べているが、在華イエズス会士はしばしば中国の翰林院をパリ科学アカデミーになぞらえ、さらに翰林院は中国における「文芸共和国の一員」であると述べた。満洲語について語る際、アミオがこのように直接的、あるいは間接的な形で、「文芸共和国」に繰り返し言及したのは何故か。

アミオは、自分が満洲語研究を勧めるのは「文芸共和国」の「学者（savants）」に対してであり、「文学者（littérateurs）」に対してではないと述べている。諸先行研究によれば、18 世紀当時のヨーロッパ知識人にとって「学者」とは、自己満足のために能力を費やす「文学者」とは異なり、公共性に照らして「有用な（utile）」ものを追求する存在だった。すなわちアミオは、従来ヨーロッパにおいてほとんど関心を持たれることの無かった満洲語研究を、「有用な」営為として、ヨーロッパの文芸共和国を構成する「学者」との自負を持つ人々に、訴えたのである。

続く 19 世紀、ラングレやクラプロート、レミュザによって、ヨーロッパにおける本格的な満洲語研究が開始された。彼らにとってアミオの満洲語に関する報告は、最も重要な先行研究だったため、それらを編纂、出版し、或いは批判的に研究することによって、満洲語研究の素地を作った。ただそれのみならず、満洲語を「有用な」研究対象としてヨーロッパに伝え続けたことは、19 世紀に満洲語研究が開始されるための環境を少なからず準備したと考えられる。

第六章　清朝出版事業とアミオの中国史叙述

第六章では、アミオによる長大な中国史叙述『年代記形式による、中国帝国普遍史概説（*Abrégé chronologique de l' Histoire universelle de l' Empire chinois*）』（1769 頃）を中心に検討した。17 世紀以来、聖書に基づく「神聖な」歴史を補完するものとしての「世俗の」歴史に対する研究の機運が高まる中で、中国の歴史に対する関心も高まっていった。こうしたヨーロッパにおける思潮に呼応して、ゴウヴェア（António de Gouvea）やマルティニ、クプレを始めとする在華イエズス会士は、中国の歴史に関する様々な報告をヨーロッパへ送った。在華イエズス会士による中国史叙述は、基本的に『資治通鑑』系統の書物を始めとする中国文献に依拠しつつ、様々な独自の要素も含んでいる。これらの要素は、在華イエズス会士によって紹介された中国の歴史への、ヨーロッパ知識人からの厳しい問いに対峙し、それらに応答する試みのなかで練り上げられていった。

中国の歴史をめぐる、在華イエズス会士とヨーロッパ知識人の論争とは，概ね中国の歴史をめぐる真正性（authenticité）を問題とするものだったといえる。「神聖な」歴史を中心とする歴史叙述＝普遍史を中心とする時代においては，聖書との一致こそが真正性の表現であった。そのためマルティニは、当時ヨーロッパで公認されたウルガタ訳聖書ではなく、七十人訳聖書に基づく年代法を採用することによって、中国の歴史が聖書と調和可能であることを示した。何故ならウルガタ訳聖書に従った場合、中国史の起点が聖書に書かれた大洪水に先行することになり、大洪水の普遍性が揺らいでしまうため、より古い時代を取扱い得る七十人訳聖書年代法を採用したのである。

七十人訳聖書の採用は、当時の著名な年代学者フォシウス（Vossius）らからは共鳴を得たが、その一方で、在華イエズス会士が中国文献に盲従し、それらに記された中国史の古さを信じ込む故に、最も正統的なウルガタ訳聖書に背いたという批判も惹起した。この批判は、在華イエズス会士が依拠した中国文献の真正性に対する強い疑念をも含んでいる。

これに対し 18 世紀前半の在華イエズス会士プレマールやパルナン（Dominique Parrenin）は、中国の歴史家が史料の確実性に応じて、中国の歴史を「伝説上の」或いは「神話上の」時代、「疑わしく不確実な」時代、そして「確実かつ疑う余地の無い」時代の三つに区分しているという説を提示した。これらは神話時代、神話と歴史の中間の時代、歴史時代と言い換えても差し支えないだろう。こうした議論の背景には、中国における歴史叙述の誠実さ、そして自らが依拠する中国文献の真正性を強調する狙いがあったものと考えられる。

中国の歴史をめぐる論争は、中国上古時代における天文観察記録の信憑性にも及んだ。

何故なら天文観察記録は、中国では伝統的に歴史叙述と連動して行われ、相互の信憑性を保証し合うとして多くのヨーロッパ知識人から注目を集めたからである。中国最古の天文観察記録として、マルティニやクプレの著作に現れた顓頊の時代の五星会合は、著名な天文学者カッシーニ（Giovanni Domenico Cassini）およびその説を支持する多くのヨーロッパ知識人から、その信憑性が否定された。

これに対し、ゴービルを始めとする 18 世紀前半の在華イエズス会士も、当該の五星会合は中国文献にもほとんど典拠が見られないとして、中国文献の信憑性そのものを傷つけないよう努めつつ、この記録を中国史叙述から取り下げた。その代わり『書経』に明確な記載のある仲康日食については、その信憑性を細かく検証し、この日食が起こった紀元前 2155 年には中国で正確な天文観察が行われたことを証明することによって、他の国々に先駆けて、既に高度に発達した文明が中国に存在したことを示した。

如上の論争が展開するなかで、いかなる中国文献をより真正とすべきかという問題も、議論の的となった。前述の如く、在華イエズス会士は主に『資治通鑑』系統の書物に依拠したが、これに対し碑文文芸アカデミー終身書記で中国文化に精通したフレレ（Nicolas Frèret）は、『書経』や『竹書紀年』に比べると真正性が著しく劣るとして批判した。これを受けドゥ・マイヤは、フレレが特に好む『竹書紀年』の由来の疑わしさを、中国の学者たちの意見を根拠として主張した。この論争の中で、フレレとドゥ・マイヤはそれぞれ中国における歴史叙述の伝統について、中国で編纂された主な史書および歴史関係書の紹介を含めて概説しており、ヨーロッパにおける中国史理解の深化を促した。

以上の在華イエズス会士による様々な議論は、18 世紀末のアミオにも受け継がれた。マルティニ以来の在華イエズス会士が中国史叙述に付加した要素は、アミオの叙述の基礎となっている。しかしアミオは、前の世代からの伝統をただ受け継いだのではなく、彼自身の独自性も随所に見られる。特に重要なのは、アミオが七十人訳聖書年代法のなかでも、特に古い時期に天地創造や大洪水の年代を置くペズロン（Paul Yves Pezron）の年代法を独自に採用し、歴史時代の始点を、従来の在華イエズス会士より遥かに早い黄帝の治世第 61 年に置いたことが挙げられる。これらの独自性の由来は、彼が選択した中国文献、すなわち清朝による諸欽定書に付された「歴代三元甲子編年」にある。

さらに重要なのは、従来の在華イエズス会士が「本文（texte）」と「注釈（glose）」を区別せず、叙述の中に混在させてきた、というアミオの批判である。「本文」とは、康熙帝の下で編纂された『御製資治通鑑綱目前編』や乾隆帝の下で編纂された『御製繙訳書経』の

正文などを、「注釈」とは従来の在華イエズス会士が『資治通鑑』系統の書物と共によく用いた通俗史書の『綱鑑』などを指す。アミオが「歴代三元甲子編年」を選択したことを含め、ここには清朝欽定書を最も真正な文献とする、強い正統主義的傾向が見られる。

9．結論

以上の各章で論じた如く、アミオの中国研究は、前の世代の在華イエズス会士によって打ち立てられた「原基的中国学」を継承しつつ、明確な独自性をも示していた。アミオの独自性について、ここではヨーロッパにおける普遍性（universalité）をめぐる思想的営みの歴史との連関を軸に、歴史のなかに位置付けたい。アミオに先行する在華イエズス会士にとっての中国とは、あくまで唯一の普遍的存在としてのカトリック教会に対する特殊的存在だったといえる。彼らが中国文明と普遍性とを結び付けて語る場合、それは基本的にカトリック教会に代表される普遍性を中国にまで敷衍する形をとった。その表れとして、本論文でも触れた、陰陽理論を中心とする中国の万物生成思想を把握する際、もっぱらカトリックの教義との親和性に重きを置く態度や、ラテン語を唯一無比の普遍語とし、ラテン語によって結ばれたカトリック世界のみに普遍性を見る態度、そして中国の歴史を「神聖な」歴史の補完物＝「世俗の」歴史として捉える態度などを挙げることができよう。

これに対しアミオは、中国において、18 世紀後半のヨーロッパに現れた様々な新しい「科学（science）」の源流や、「公（public）」の理念を中心とする政治運営の模範的あり方、そして「ヨーロッパ諸語と同じく」完全であり、フランス語と同等の明晰さと正確さを備えた普遍語を見出した。こうした 16 世紀末からアミオに至る過程は、ヨーロッパ思想史の大きな流れ、すなわち中世以来ヨーロッパにおいて持続してきたカトリック教会およびスコラ哲学の権威が、科学と数学を始めとする諸領域において新しい発見が蓄積され、人間理性の適用による知識獲得に対し信頼が高まるにつれ、根本から揺らいでいくという過程に即している。これは、カトリック教会を中心とした世界に関する叙述である「普遍史」から、ヴォルテールによる「世界史」へという、歴史叙述のあり方における大きな転換が象徴的に表しているように、普遍性を体現する存在が変わっていく過程としても理解される。

但し各章において明らかになったように、アミオは決してカトリックを放棄した訳ではない。それどころか、17 世紀の在華イエズス会士によって打ち立てられた、儒教経書における「天」や「上帝」をカトリックの神とする説を復活させ、また万物生成理論の最上位にやはり神を置いてさえいる。さらに第四章で述べた如く、アミオは乾隆帝に対し古代ユ

ダヤの大祭司を表す「神官長」などの呼称を用い、中国人がノアの子孫を媒介とする原始キリスト教の正統な継承者であるとほのめかしている。つまり先行する在華イエズス会士と同じく、アミオにとってもカトリックの権威は脅かすべからざるものであり、中国文明とカトリックの調和は依然として重大な問題ではあった。しかしアミオの議論は、むしろ両者の調和を前提と化している。その上で、議論の焦点を新しい普遍の担い手たる科学や公論、そして有用性を追求する「学者（savant）」から成る文芸共和国の発展に対し、中国文明がいかに寄与できるかという問題へと移した点に、大きな独自性が認められる。

参考文献一覧

１．一次史料

（１）フランス国立図書館手稿の部（Bibliothèque nationale de France, Département des manuscrits）所蔵史料

Bréquigny 1: Mélanges sur la Chine et les Chinois; AMIOT, le P., Notes et mémoires sur la Chine et les Chinois.

Bréquigny 2: Mélanges sur la Chine et les Chinois; AMIOT, le P., Notes et mémoires sur la Chine et les Chinois.

Bréquigny 6: Mélanges sur la Chine et les Chinois; Mémoire du P. AMIOT sur l'art militaire des Chinois, et traduction de traités de tactique chinois.

Bréquigny 7: Mélanges sur la Chine et les Chinois; « Abrégé chronologique de l'histoire universelle de l'Empire chinois » par le P. AMIOT.

Français 9089: « Mémoire sur la musique des Chinois, tant anciens que modernes, » par le P. AMIOT, Jésuite. (1776).

Français 12210-12214: « Histoire générale de Chine, tirée des Annales de l'Empire, » par le P. MOYRIAC DE MAILLA, Jésuite. (1729).

Français 17240: Mélanges sur la Chine; « Histoire chinoise » par PARRENIN, le P. Dominique.

NAF 4420: « La vie de Koung-tsee, appelé vulgairement Confucius,... » par le Père AMIOT. (1784).

Mandchou 275: « Grammaire mandchoue » par le P. Jean DOMENGE.

Mandchou 285: « Hymne mandchou chanté à l'occasion de la conquête du Jin-chuan [金川] ».

（２）台湾中央研究院歴史語言研究所所蔵史料

内閣大庫檔案：182656-001

２．編纂史料

（１）欧文

Amiot, Jean Joseph Marie, *Éloge de la ville de Moukden et de ses environs: poëme composé par Kien-Long, Empereur de Chine*, Paris : Tilliard, 1770.

Amiot, Jean Joseph Marie, *Dictionnaire Tartare-Mantchou-François*, 3 vols., Rédigé et publié avec

des additions et I'Alphabet de cette langue, par L. Langlès, Paris: Fr. - Amb. Didot, 1789- 1790.

Couplet, Philippe, Intorcetta, Prospero, et al., *Confucius Sinarum Philosophus: sive Scientia Sinensis*, Paris: Danielem Horthemels, 1687.

Banier, Antoine, *La mythologie et les fables expliquées par l' histoire*, 3 vols., Paris: Briasson, 1738-1740.

Berlié, *Essai historique et chronologique*, Lyon: J. Deville, 1766.

Bayle, Pierre, *Réponse aux questions d' un provincial*, Tome 2, Rotterdam: Leinier Leers, 1706.

Cassini, Giovanni Domenico, "Reflexions sur la chronologie chinoise par Monsieur Cassini", *Du Royaume De Siam: Contenant plusieurs Piéces détachées*, 2, Amsterdam: Abraham Wlfgang, pp. 304-321.

Comte de Mellet, "Recherches sur les tarots", Antoine Court de Gébelin, *Monde primitif, analysé et comparé avec le monde modern*, 8 (1), Paris: Valleyre, 1781, pp. 395-411.

Court de Gébelin, Antoine, *Monde primitif, analysé et comparé avec le monde modern*, 8 (1), Paris: Valleyre, 1781, pp. 395-411.

De Choisy, François-Timoléon, *Journal ou suite du voyage de Siam*, Amsterdam: Pierre Mortier, 1687.

De guignes, Joseph, "Lettre de M. de Guignes, de l' Académie des Inscriptions, à Messieurs les auteurs du Journal des Sçavans, au sujet de deux Voyageurs Mahométans, dont les Relations ont été traduites & publiées par M. l' Abbé Renaudot", *Journal des Sçavans*, Novembre 1764, pp. 718-725.

De Magalhães, Gabriel, *Nouvelle relation de la Chine*, Paris: Barbin, 1688.

De Mailla, Anne Marie de Moyriac, *Histoire générale de la Chine, ou Annales de cet empire, traduit du Tong-Kien-Kang-Mou*, 12 vols., Paris: Ph. D. Pierre, Clousier, 1777-1783.

De Mairan, Jean Jacques Dortous, *Lettres de M. de Mairan, au R. P. Parrenin*, Paris: Desaint & Saillant, 1759.

De Prémare, Joseph Henri Marie, *Vestiges des principaux dogmes chrétiens*, Paris: Bureau des Annales de philosophie chrétienne, 1878.

De Silhouette, Étienne, *Idée générale du gouvernement et de la morale des Chinois*, Paris, 1729.

De Silhouette, Étienne, *Idée générale du gouvernement et de la morale des Chinois et réponse a trois critiques*, Paris : Quillau, 1731.

De Silhouette, Étienne (tr.), *Essai sur l'Homme, par Monsieur Alexandre Pope*, Paris, 1736.

De Silhouette, Étienne (tr.), *Dissertations sur l'union de la religion, de la morale, et de la politique, tirées d'un ouvrage de M. Warburton*, 2 vols., Londres, 1742.

Deslon, Charles, "Observations sur le magnéetisme animal", *Journal de medicine, chirurgie, pharmacie, &c.*, 54, octobre 1780.

Dictionnaire de l'Académie Française, 2 vols., Nîmes: Pierre Beaume, 1778.

Dictionnaire universel françois et latin, vulgairement appelé Dictionnaire de Trévoux, nouvelle édition, 8 vols., Paris: Compagnie des libraires, 1771.

Diderot, Denis, & D'Alembert, Jean le Rond, *Encyclopedié ou Dictionnaire raisonné sciences, des arts et des métiers*, Paris: Briasson, 1751-1772.

Du Halde, Jean Baptiste, *Description géographique, historique, chronologique, politique, et physique de l'Empire de la Chine et de la Tartarie chinoise*, 4 vols., Paris: Lemercier, 1735.

Du Tems, Hugues, *Le clergé de France, ou tableau historique et chronologique des archevêques*, 2, Paris: Delalain, 1774.

Frèret, Nicolas, "De l' antiquité et de la certitude de la chronologie chinois", *Mémoires de Académie des inscriptions & belles-lettres*, 10, 1736, pp. 377-402.

Frèret, Nicolas, "Éclaircissement sur la Mémoire lû au mois de Novembre 1733, touchant l' antiquité et la certitude de la chronologie chinoise", *Mémoires de Académie des inscriptions & belles-lettres*, 15, 1743, pp. 493-564.

Frèret, Nicolas, "Suite du traité touchant la certitude et l' antiquité ; servant d' éclaircissement au Mémoire lû sur la même matiére au mois de Novembre 1733", *Mémoires de Académie des inscriptions & belles-lettres*, 18, 1753, pp. 178-205.

Gaubil, Antoine, *Traité de la chronologie chinoise: divisé en trois parties*, Paris : Treuttel et Wurtz, 1814.

Le Comte, Louis, *Nouveaux Mémoires sur l' état présent de la Chine*, 2 vols., Paris: Jean Anisson, 1696.

Lettres édifiantes et curieuses, écrites des missions étrangères, édition du Querbœuf, 26 vols., Paris: J. G. Merigot, 1780-1783.

Longobardo, Nicolas, "Traité sur quelques points de la réligion des Chinois", Gottfried Wilhelm von Leibniz, *Epistolae ad diversos*, 2, Lipsiae: sumto Bern. Christoph. Breitkopfii, 1735.

Martini, Martino, *Sinicae Historiae Decas prima*, Munich: Straub, 1658.

Mémoires concernant l'histoire, les sciences, les arts, les mœurs, les usages, &c. des Chinois, 15 vols., Paris: Nyon, 1776-1791.

Mesmer, Franz Anton, *Mémoire sur la découverte du magnétisme animal*, Geneve et Paris: Firmin Didot le jeune, 1779.

Murray, Hugh et al., *An Historical and Descriptive Account of China*, vol. 1, Edinburgh: Oliver & Boyd, 1836.

Nouvelles ecclésiastiques, Paris: Le Clere, 1728-1803.

"Nouvelles Littéraires: *Rapport des Commissaires nommés par le Roi, pour l' examen du Magnétisme Animal*", *Mercure de France*, Samedi 4 Septembre 1784, pp. 7-22.

Rameau, Jean Philippe, *Traité de l' harmonie, reduite à ses principes naturels*, Paris: Ballard, 1722.

Renaudot, Eusèbe, *Anciennes Relations des Indes et de la Chine de deux voyageurs Mahométans, qui y allerent dans le neuvième siècle*, Paris: Coignard, 1718.

Roussier, Pierre Joseph, *Mémoire sur la musique des Anciens*, Paris: Lacombe, 1770.

Sheffield, John (ed.), *Miscellaneous Works of Edward Gibbon, Esquire*, 1, Dublin: P. Wogan, 1796.

Shuckford, Samuel, *The Sacred and Prophane History of the World Connected*, 2 vols., London: R. Knaplock & J. Tonson, 1728-30.

Sonnerat, Pierre, *Voyages aux Indes orientales et a la Chine*, Paris : Froullé, 1782.

Souciet, Etienne (ed.), *Observations Mathématiques, Astronomiques, Geographiques, Chronologiques et Physiques, tirées des anciens livres chinois*, 1, Paris: Rollin, 1729.

Verbiest, Ferdinand, "Elementa Linguae Tartaricae", *Relations de divers voyages curieux de M. Thevenot*, Paris: Thomas Moette, 1696.

Voltaire, *Abregé de l' histoire universelle*, 1, A Haye & Berlin: Jean Neaulme, 1754.

Voltaire, "Fragmens sur l'histoire générale", *Collection Complette des oeuvres de Mr. de Voltaire*, 37, Londres, 1774.

Von Leibniz, Gottfried Wilhelm, *Discours sur la théologie naturelle des Chinois*, written in 1716 (présentés, traduits et annotés par Christiane Frémont, Paris : L'Herne, c. 1987).

Warburton, William, *Essai sur les hiéroglyphes des Égyptiens*, 2, Paris, 1744

（２）漢文（※十三経を除く、また使用版本をカッコ内に示す）

司馬遷（前漢）『史記』（北京：中華書局、2013 年）。
王粛（魏）『孔子家語』（『孔子家語逐字索引』香港：商務印書館、1992 年）。
皇甫謐（晋）『帝王世紀』（台北：藝文印書館、1967 年）。
張湛（晋）注『列子』（『列子逐字索引』（香港：商務印書館、1996 年）。
裴駰（南朝宋）『史記集解』（『校刊史記集解索隠正義札記』北京 ： 中華書局、1977 年）。
張守節（唐）『史記正義』（『校刊史記集解索隠正義札記』北京 ： 中華書局、1977 年）。
司馬貞（唐）『史記索隠』（『校刊史記集解索隠正義札記』北京 ： 中華書局、1977 年）。
王冰（唐）注『黄帝内経素問』（『重広補注黄帝内経素問』台北：藝文印書館、1967 年）。
史崧（宋）音釈『黄帝内経霊枢』（台北：台湾中華書局、1965 年）。
司馬光（北宋）『資治通鑑』（台北 ： 宏業書局、1974 年）。
劉恕（北宋）『資治通鑑外紀』（台北：台湾商務印書館、19-- ? 年）。
朱熹（南宋）『論語集註』（北京 ： 中華書局、1983 年）。
朱熹（南宋）『朱子語類』（『朱子全書』第 14-18 冊、上海 ： 上海古籍出版社、2002 年）。
朱熹（南宋）『晦庵集』（『景印文淵閣四庫全書』第 1143-46 冊、台北：台湾商務印書館、1983-86 年）。
鄭樵（南宋）『通志』（北京：中華書局、1983 年）。
陳鎬（明）『闕里誌』（『北京図書館古書珍本叢刊』第 23 冊、北京：書目文献出版社、1987 年）。
薛応旂（明）『四書人物備考』（国立公文書館所蔵、高野山釋迦文院本『新刻七十二朝四書人物考註釋四十卷』、明万暦刊）。
高濂（明）『遵生八牋』（『遵生八牋校注』北京 ： 人民衛生出版社、1994 年）。
顧錫畴（明）『綱鑑正史約』（東洋文化研究所所蔵、浙江：浙江書局、同治 8 年刊）。
趙撝謙（明）『六書本義』（台北：商務印書館、19-- ? 年）。
朱載堉（明）『楽律全書』（『北京図書館古書珍本叢刊』第 4 冊、北京：書目文献出版社、1987 年）。
利瑪竇（明）『天主実義』（『天学初函』第 1 冊、台北：台湾学生書局、1965 年）。
王世貞（明）『綱鑑大全』（東洋文化研究所所蔵、横秋閣蔵板、明刊本）。
袁黄（明）『歴史綱鑑補』（『綱鑑合編』北京：北京市中国書店、1985 年）。
鍾惺（明）『鼎鋟鍾伯敬訂正資治綱鑑正史大全』（東洋文化研究所所蔵、呈祥館藏板、崇禎元年跋）。

張言行（清）『聖門礼楽統』(『四庫全書存目叢書』第 272 冊、済南：斉魯書社、1995-1997 年)。
阿桂（清）等『平定両金川方略』(『景印文淵閣四庫全書』第 360-1 冊、台北：台湾商務印書館、1983-86 年)。
銭泳（清）『履園叢話』(北京：中華書局、1979 年)。
張振鋆（清）『釐正按摩要術』(北京：北京市中国書店、1986 年)。
中国第一歴史檔案館編『乾隆朝上諭檔』全 18 冊、北京：檔案出版社、1991 年。
中国第一歴史檔案館編『乾隆朝起居注』全 42 冊、桂林 ： 広西師範大学出版社、2002 年。
『大清高宗純(乾隆)皇帝実録』全 30 冊、台北：華聯出版社、1964 年。
崑岡（清）等『欽定大清会典事例』出版地不明 ： 商務印書館、光緒 34（1908）年。
黄伯禄（清）『正教奉褒』（『中國天主教史籍彙編』新荘 ： 輔仁大学出版社、2003 年）。

（３）満文（満漢併記を含む）

dzi jy tung giyan g' ang mu bithe（『満文資治通鑑綱目』)、康熙 30（1691）年。
han i araha manju gisun i buleku bithe（『御製清文鑑』)、康熙 47（1708）年。
cing wen ki men bithe（舞格撰『滿漢字清文啓蒙』)、雍正 8（1730）年。
han i araha mukden i fujurun bithe（『御製盛京賦』)、乾隆 8（1743）年。
manju isabuha bithe（李延基編『清文彙書』)、乾隆 16（1751）年。
han i araha ubaliyambuha dasan i nomun（『御製繙訳書経』)、乾隆 25（1760）年。
han i araha nonggime toktobuha manju gisun i buleku bithe（『御製増訂清文鑑』)、乾隆 36（1771）年。

３．研究著作

（１）和文

吾妻重二「朱子の象数易思想とその意義」『フィロソフィア』68、1980 年、145-175 頁。
吾妻重二『朱子学の新研究』東京：創文社、2004 年。
アポストリデス、ジャン・マリー（水林章訳）『機械としての王』東京：みすず書房、1996 年。
安大玉『明末西洋科学東伝史――『天学初函』器編の研究』東京：知泉書館、2007 年。
安藤隆穂編『フランス革命と公共性』名古屋：名古屋大学出版会、2003 年。

井川義次『宋学の西漸——近代啓蒙への道』京都：人文書院、2009 年。

池上二良『満洲語研究』東京：汲古書院、1999 年。

石田幹之助『欧米・ロシア・日本における中国研究』東京：科学書院、1997 年（『欧人の支那研究』東京：共立社書店、1932 年および『欧米に於ける支那研究』東京：創元社、1942 年の復刊）。

彌永信美『幻想の東洋——オリエンタリズムの系譜』東京：青土社、1987 年。

ヴァリニャーノ（松田毅一訳）『日本巡察記』東京：平凡社、1973 年。

江上波夫・高田時雄編『東洋学の系譜』東京：大修館書店、1992-6 年。

大愛崇晴「ケプラーにおける協和音の問題」『美学』57(4)、2007 年、55-68 頁。

大野英二郎『停滞の帝国——近代西洋における中国像の変遷』東京：国書刊行会、2011 年。

岡崎勝世『聖書 vs. 世界史——キリスト教的歴史観とは何か』東京：講談社、1996 年。

岡崎勝世『キリスト教的世界史から科学的世界史へ——ドイツ啓蒙主義歴史学研究』東京：勁草書房、2000 年。

岡崎勝世『世界史とヨーロッパ——ヘロドトスからウォーラーステインまで』東京：講談社、2003 年。

岡崎勝世『科学 vs. キリスト教——世界史の転換』東京：講談社、2013 年。

岡本隆司『近代中国と海関』愛知：名古屋大学出版会、1999 年。

隠岐さや香「数学と社会改革のユートピア」金森修編『科学思想史』東京：勁草書房、2010 年。

隠岐さや香『科学アカデミーと「有用な科学」——フォントネルの夢からコンドルセのユートピアへ』名古屋：名古屋大学出版会、2011 年。

小田部胤久『芸術の逆説——近代美学の成立』東京：東京大学出版会、2001 年。

河内良弘『満洲語文語文典』京都：京都大学学術出版会、1996 年。

川出良枝『貴族の徳、商業の精神——モンテスキューと専制批判の系譜』東京：東京大学出版会、1996 年。

川出良枝「近代フランスにおける公私観念の転換——『武』の公共性から『商』の公共性へ」、佐々木毅・金泰昌編『欧米における公と私』東京：東京大学出版会、2002 年。

川原秀城「律呂正義続編について——西洋楽典の東漸」『中国研究集刊』9、1990 年、534-543 頁。

川原秀城「数と象——皇極経世学小史」『中国——社会と文化』12、1997 年、394-357 頁。

神田喜一郎・西川寧監修『清鄭板橋懐素自叙帖——岣嶁碑』東京：二玄社、1970 年。
岸本美緒『東アジアの「近世」』東京：山川出版社、1998 年。
木下鉄矢「理・象・数そして数・象・理——朱熹の易理解」『東洋古典学研究』3、1997 年、23-66 頁。
久保正彰「「アシア」管見」『中国——社会と文化』4、1989 年、310-317 頁。
蔵持不三也『シャルラタン——歴史と諧謔の仕掛人たち』東京：新評論、2003 年。
児玉憲明「劉歆の音律理論」『待兼山論叢』15（哲学）、1981 年、33-47 頁。
後藤末雄『中国思想のフランス西漸』全 2 巻、東京：平凡社、1969 年（初版は『支那思想のフランス西漸』、東京：第一書房、1933 年）。
ゴドウィン、ジョスリン（斉藤栄一訳）『星界の音楽　神話からアヴァンギャルドまで——音楽の霊的次元』東京：工作舎、1990 年。
ゴドウィン、ジョスリン（高尾謙史訳）『音楽のエゾテリスム——フランス「1750-1950」秘教的音楽の系譜』東京：工作舎、2001 年。
ジェイムズ、ジェイミー（黒川孝文訳）『天球の音楽——歴史の中の科学・音楽・神秘思想』東京：白揚社、1998 年。
柴田篤「明末天主教の霊魂観——中国思想と対話をめぐって」『東方学』76、1988 年、94-107 頁。
柴田篤「『天主実義』の成立」『哲学年報』51、1992 年、147-166 頁。
柴田篤「天主教と朱子——『天主実義』第二篇を中心にして」『哲学年報』52、1993 年、125-144 頁。
柴田篤「中・西の対話を支えるもの——明末天主教思想をめぐって」『九州中国学会報』40、2002 年、53-69 頁。
柴田篤訳注、マテオ・リッチ『天主実義』東京：平凡社、2004 年。
澁谷浩一「中国第一歴史檔案館所蔵『蒙古堂檔』及び『満文奏勅』について」『満族史研究通信』6、1997 年、21-31 頁。
澁谷浩一「清朝と内陸アジアの関係を研究するための第一級史料」『東方』313、2007 年、31-4 頁。
シャルティエ、ロジェ（松浦義弘訳）『フランス革命の文化的起源』東京：岩波書店、1999 年。
庄子大亮「古代の言説とヨーロッパ・アイデンティティ」『人文知の新たな総合に向けて

——21 世紀 COE プログラム「グローバル化時代の多元的人文学の拠点形成」』 第 2 回報告書 1（歴史篇）、2004 年。
杉本良男「所謂典礼問題に就て」『国立民族学博物館調査報告』62、2006 年、371-420 頁。
ソーマ（宮庄哲夫訳）「ヨセフスと大祭司」、フェルトマン・秦剛平共編『ヨセフス・ヘレニズム・ヘブライズム』I、東京：山本書店、1985 年。
高瀬弘一郎『キリシタン時代の文化と諸相』東京：八木書店、2001 年。
高田佳代子「「イエズス会後期における中国理解について——『大学』と『易経』を中心に——」修士論文（東京大学）、2008 年。
高橋裕史『イエズス会の世界戦略』東京：講談社、2006 年。
田中有紀「朱載堉の黄鐘論「同律度量衡」——累黍の法と九進法、十進法の並存」『中国哲学研究』2011 年、66-104 頁。
田中有紀「何瑭の陰陽論と楽律論——明代後期楽論及び朱載堉との比較を通して——」『中国哲学研究』2014 年、1-63 頁。
チュイリエ、ジャン（高橋純・高橋百代共訳）『眠りの魔術師メスマー』東京：工作舎、1992 年。
黨武彦「清代の翰林院——清初から嘉慶期まで」『専修大学人文科学研究所月報』、195、2001 年、1-15 頁。
富永茂樹「徳と効用のあいだ——フランス革命期における科学と芸術」『人文学報』70、 1992 年、59-94 頁。
中砂明徳『江南——中国文雅の源流』東京：講談社、2002 年。
中砂明徳『中国近世の福建人——士大夫と出版人』名古屋 ：名古屋大学出版会、2012 年。
仲松優子「18 世紀バ=ラングドック地方における公証人——制度的観点から」『千葉大学社会文化科学研究』8、2004 年、143-149 頁。
ナドー、ジャン＝ブノワ＆バーロウ、ジュリー（中尾ゆかり訳）『フランス語のはなし——もうひとつの国際共通語』大修館書店、2008 年。
新居洋子「アレーニ『西學凡』とその序、引、跋——明末中国における西学受容の一形態」『中国哲学研究』第 26 号、2012 年、1-33 頁。
二宮宏之『フランス　アンシアン・レジーム論』東京：岩波書店、2007 年。
二宮フサ「ヴェルサイユからアユタヤへ——十七世紀ショワジ師の船旅」『東京女子大学紀要論集』42（1）、1991 年、59-61 頁。

バーク、ピーター（原聖訳）『近世ヨーロッパの言語と社会——印刷の発明からフランス革命まで』東京：岩波書店、2009 年。
羽田亨『満和辞典』東京：国書刊行会、1972 年（京都帝国大学満蒙調査会、1937 年の複製）。
羽田正『東インド会社とアジアの海』東京：講談社、2007 年。
ビュフォン（菅谷暁訳）『自然の諸時期』東京：法政大学出版局、1994 年。
福井文雅『欧米の東洋学と比較論』東京：隆文館、1989 年。
福島仁「ヨーロッパ人による最初の理気論——西洋の神と朱子学の理」『中国——社会と文化』4、1989 年、25-33 頁。
福島仁「『中国人の宗教の諸問題』訳注（上）」『名古屋大学文学部研究論集（哲学）』25、1990 年、47-73 頁。
藤井清久「粒子論哲学からニュートン原子論へ」化学史学会編『原子論・分子論の原典』第一巻、東京：学会出版センター、1989 年。
フュレ、フランソワ＆オズーフ、モナ（河野健二・阪上孝・富永茂樹監訳）『フランス革命事典』五、東京：みすず書房、2000 年。
堀池信夫『中国哲学とヨーロッパの哲学者』東京：明治書院、1996-2002 年。
ボルペール、ピエール＝イヴ（深沢克己訳）『「啓蒙の世紀」のフリーメイソン』東京：山川出版社、2009 年。
水林章『公衆の誕生、文学の出現——ルソー的経験と現代』東京：みすず書房、2003 年。
村上信明『清朝の蒙古旗人——その実像と帝国統治における役割』東京：風響社、2007 年。
村上信明「乾隆朝の繙訳科挙と蒙古旗人官僚の台頭」『社会文化史学』43、2002 年、63-80 頁。
森原隆「フランス絶対王政期における『ガゼット』の成立について」『人文学報』63、1988 年、121-144 頁。
森原隆「18 世紀後期フランスにおける外国紙と『ガゼット』」『金沢大学文学部論集』史学科篇 16、1996 年、33-68 頁。
矢沢利彦『北京四天主堂物語——もう一つの北京案内記』東京：平河出版社、1987 年。
矢沢利彦『西洋人の見た中国皇帝』東京：東方書店、1992 年。
山崎耕一「18 世紀のフランス」佐藤彰一・中野隆生編『フランス史研究入門』東京：山川出版社、2011 年、128-141 頁。
山本義隆『磁力と重力の発見』第三巻、東京：みすず書房、2003 年。

吉原瑛「導引に関する研究（その一）――中国古代の体操術」『体育学研究』10（1）、1965年、45頁。

吉原瑛「中国近世の導引」『体育學研究』11（4）、1967年、213-221頁。

吉村正和「トランスレーション言説研究――意味の等価を超えて」名古屋大学国際言語文化研究科『「多元文化と未来社会」研究プロジェクト研究報告書』、2005年、171-183頁。

ロウビンズ、ロバート・ヘンリー（中村完・後藤斉訳）『言語学史』第三版、東京：研究者出版、1992年。

渡辺純成「満洲語のユークリッド――東洋文庫所蔵の満文『算法原本』について」『満族史研究』3、2004年、40-90頁。

渡辺純成「東洋文庫所蔵の満洲語『算法原本』について」『数理解析研究所講究録』1392, 2004年、90-103頁。

渡辺純成「満洲語医学書『格体全録』について」『満族史研究』4、2005年、22-113頁。

（２）欧文

App, Urs, *The Birth of Orientalism*, Philadelphia:University of Pennsylvania Press, 2010.

Balayé, Simone, *La Bibliothèque Nationale des origines à 1800*, Genève: Librairie Droz S. A., 1988.

Barnes, Linda L., *Needles, Herbs, Gods, and Ghosts: China Healing and the West to 1848*, Cambridge, MA: Harvard University Press, 2005.

Bibliothèque nationale de France (ed.), *Les directeurs de la Bibliothèque nationale*, Paris: Bibliothèque nationale de France, 2004.

Brix, Michel & Lenoir, Yves, “Une lettre inédite du Père Amiot à l’ abbé Roussier (1781)”, *Revue des archeologues et historiens d’art de Louvain*, 28, 1995, pp. 63-74.

Brix, Michel & Lenoir, Yves, “Le “Supplément au Mémoire sur la musique des Chinois” du Père Amiot. Édition commentée”, *Revue des archeologues et historiens d’art de Louvain*, 30, 1997, pp. 79-111.

Brockey, Liam Matthew, *Journey to the East: The Jesuit Mission to China, 1579-1724*, Cambridge: Harvard University Press, 2007.

Buchwald, Jed Z., & Feingold, Mordechai, *Newton and the Origin of Civilization*, Princeton and Oxford: Princeton University Press, 2013.

Bussière, Georges, “Les ministères de Bertin, Bertin à la Cour, Bertin chez lui: Le «Petit Ministère»

(1763-1780) IV", *Bulletin de la Société historique et archéologique du Périgord*, 36, 1909.

Camps, Arnulf, *Studies in Asian Mission History: 1956 – 1998*, Leiden: Brill, 2000.

Chopard, Marie Hélène Froeschlé, "L' évolution d' un périodique ennemi des philosophes :Les *Nouvelles ecclésiastiques* entre 1750 et 1780", Didier Masseau (dir.), *Les Marges des Lumières françaises (1750-1789)*, Genève: Droz, 2004, pp. 91-110.

Christensen, Thomas, *Rameau and Musical Thought in the Enlightenment*, Cambridge: Cambridge University Press, 1993.

Coelho, Victor (ed.), *Music and Science in the Age of Galileo*, Dordrecht: Kluwer Academic Publishers, 1992.

Coogan, Michael David, "Alphabets and Elements", *Bulletin of the American Schools of Oriental Research*, 216, 1974, pp. 61-3.

Cranmer-Byng, John & Wills, John E. Jr., "Trade and Diplomacy with Maritime Europe", John E. Wills, Jr. (ed.), *China and Maritime Europe, 1500-1800: Trade, Settlement, Diplomacy, and Missions*, Cambridge; New York: Cambridge University Press, 2011, pp. 183-254.

Crossley, Pamela Kyle, "The Rulership of China", *The American Historical Review*, 97 (5), 1992, pp. 1468-1483.

Crossley, Pamela Kyle, *The Manchus*, Cambridge, Mass.: Wiley-Blackwell, 1997.

Crossley, Pamela Kyle & Rawski, Evelyn Sakakida, "A Profile of the Manchu Language in Ch'ing History", *Harvard Journal of Asiatic Studies*, 53(1), 1993, pp. 63-102.

Darnton, Robert, *Mesmerism and the End of the Enlightenment*, Cambridge, MA: Harvard University Press, 1968.

Davin, Emmanuel, "Un éminent sinologue toulonnais du XVIIIe siècle, le R. P. Amiot, S. J. (1718-1793)", *Bulletin de l'Association Guillaume Budé*, 1(3), 1961, pp. 380-395.

De Backer, Augustin & Aloïs, *Bibliothèque des écrivains de la Compagnie de Jésus, ou notices bibliographiques*, 7 vols., Liége: Imprimerie de L. Grandmont-Donders, 1853-61.

Dehergne, Joseph, *Les deux Chinois de Bertin: L' enquête industrielle de 1764 et les débuts de la collaboration technique franco-chinoise*, Université de Paris, thèse 1965.

Dehergne, Joseph, "Une grande collection : Mémoires concernant les Chinois (1776-1814)", *Bulletin de l'École française d'Extrême-Orient*, 70, 1983, pp. 267-298.

De la Gabelentz, Hans Conon, Élémens de la grammaire Mandchoue, Altenbourg : Comptoir de la

littérature, 1832.

Demel, Walter, “China in the Political Thought of Western and Central Europe”, Thomas. H. C. Lee (ed.), *China and Europe: Images and Influences in Sixteenth to Eighteenth Centuries*, Hong Kong: Chinese University Press, 1991, pp. 45-64.

Demiéville, Paul, “Aperçu historique des études sinologiques en France”, *Acta Asiatica* 2, 1966, pp. 56-110.

De Rochemonteix, Camille, *Joseph Amiot et les Derniers Survivants de la mission française à Pékin (1750-1795)*, Paris: Alphonse Picard, 1915.

De Sacy, Jacques Silvestre, *Henri Bertin dans le sillage de la Chine, 1720-1792*, Paris : Éditions Cathasia, les Belles Lettres , 1970.

De Saussure, Leopold, “La chronologie chinoise et l’avènement des Tcheou”, T’oung pao 23 & 29, 1924, pp. 287-346 & 1932, pp. 276-386.

Dibon, Paul, “Communication in the Respublica Literaria of the 17th Century”, *Res. Publica Litterarum*, 1, 1978, pp. 43-55.

D’ Urban, Le Marquis Fortia, “De l’ Antiquité du monde”, Charles Malo (ed.), *La France Littéraire*, 2 (5), Paris: Imprimerie de Ducessois, 1838, pp. 33-65.

Elisseeff-Poisle, Danielle, *Nicolas Fréret (1688-1749), réflexions d'un humaniste du XVIIIe siècle sur la Chine*, Paris : Presses Universitaires de France, 1978.

Elisseeff-Poisle, Danielle, “Chinese Influence in France, Sixteenth to Eighteenth Centuries", Thomas H. C. Lee (ed.), *China and Europe: Images and Influences in Sixteenth to Eighteenth Centuries*, Hong Kong: Chinese University Press, 1991, pp. 151-163.

Elverskog, Johan, *Our Great Qing: The Mongols, Buddhism, and the State in Late Imperial China*, Hawaii: University of Hawaii Press, 2006.

François, Paul, “Nec adfirmare nec refellere: les jeux du mythe et de l’ histoire”, Christian Rico et al. (eds.), *Mythes et savoirs dans les textes grecs et latins*, Toulouse: Presses Universitaires du mirail, 2008, pp. 96-110.

Gelbart, Matthew, *The Invention of “Folk Music” and “Art Music”: Emerging Categories from Ossian to Wagner*, Cambridge: Cambridge University Press, 2007.

Ghislain, Marie Josèphe, “Deux Lazaristes, originaires de la région de Chimay, émissaries de Louis XVI à la Cour Impériale de Pékin, 1785-1812”, W. F. Vande Walle (ed.), *The History of the*

Relations between the Low Countries and China in the Qing Era (1644-1911), Leuven: Leuven University Press, 2003, pp. 167-202.

Goldie, Mark & Wokler, Robert (eds.), *The Cambridge History of Eighteenth-Century Political Thought*, Cambridge: CUP, 2006.

Golvers, Noël, *Ferdinand Verbiest, S.J. (1623-1688) & the Chinese Heaven: the Composition of the Astronomical Corpus, its Diffusion and Reception in the European Republic of Letters*, Leuven: Leuven University Press, 2003.

Gorelova, Liliya M. (ed.), *Manchu Grammar*, Leiden; Boston; Köln: Brill, 2002.

Grafton, Anthony T., "Joseph Scaliger and Historical Chronology: The Rise and Fall of a Discipline", *History and Theory*, 14, 1975, pp. 156-185.

Grafton, Anthony, "Isaac Vossius, Chronologer", Eric Jorink & Dirk van Miert (eds.), *Isaac Vossius (1618-1689) between Science and Scholarship*, Leiden; Boston: Brill, 2012, pp. 43-84.

Guennou, Jean, *Missions étrangères de Paris*, Paris: Fayard, 1986.

Guy, Basil, *The French image of China before and after Voltaire*, Genève: Institut et musée Voltaire, 1963.

Harrison, Peter, *'Religion' and the Religions in the English Enlightenment*, Cambridge: Cambridge University Press, 1990.

Hermans, Michel, "Joseph- Marie Amiot, Une figure de la rencontre de 《l' autre》 au temps des Lumières", Y. Lenoir & N. Standaert (eds.), *Les Danses rituelles chinoises d'après Joseph-Marie Amiot*, Namur: Presses Universitaires de Namur, 2005, pp. 11-62.

Hsia, Adrian, "The Far East as the Philosopher's «Other»: Immanuel Kant and Johann Gottfried Herder", *Revue de littérature compare*, 297, 2001, pp. 13-29.

Huard, Pierre, Sonolet, Jacqueline & Ming Wong, "Mesmer en Chine: Trois lettres médicales du R. P. Amiot, rédigées a Pékin, de 1783 a 1790", *Revue de synthèse*, 3, 1960, pp. 61-98.

Huard, Pierre & Ming Wong, "Les enquêtes scientifiques françaises et l' exploration du monde exotique aux XVIIe et XVIIIe siècles", *Bulletin de l' Ecole française d' Extrême-Orient*, 52 (1), 1964, pp. 143-155.

Jami, Catherine, "Imeperial Science Written in Manchu in Early Qing China: Does It Matter? ", F. Bretelle-Establet (ed.), *Looking at It from Asia*, New York: Springer, 2010, pp. 371-391.

King, Gail, "The Xujiahui (Zikawei) Library of Shanghai", *Libraries and Culture*, 32 (4), 1997, pp.

456-462.

Julius von Klaproth (trad.), *Lettres sur la Littérature Mandchou, traduites du Russe de M. Afanasii Larionowitch Leontiew*, Paris: Fain, 1815.

Lackner, Michael, "Jesuit Figurism", Thomas H. C. Lee (ed.), *China and Europe: Images and Influences in Sixteenth to Eighteenth Centuries*, Hong Kong: Chinese University Press, 1991, pp. 129-149.

Lam Ching Wah, "Jean-Joseph-Marie Amiot's Writings on Chinese Music", Chime 16-17, 2005, pp. 127-147.

Landry-Deron, Isabelle, *La preuve par la Chine: La 'Description' de J.-B. Du Halde, Jésuite, 1735*, Paris: Editions de l'Ecole des hautes études en sciences sociales, 2002.

Landry-Deron, Isabelle, "Le parfait bonheur des peuples: Traduction d' extraits d' un manuel chinois pour fonctionnaires de la fin du XVIIe siècle", Jean-Louis Bacqué-Grammont, Angel Pino, &Samaha Khoury (eds.), *D'un Orient l'autre: Actes des troisièmes journées de l'Orient*, Paris; Louvain: Peeters, 2005, pp. 109-122.

Langlès, Louis Mathieu, *Alphabet Mantchou*, troisième édition, Paris: Imprimerie impériale, 1807.

Lenoir, Yves & Standaert, Nicolas (eds.), *Les Danses rituelles chinoises d' après Joseph-Marie Amiot aux sources de l' ethnochorégraphie*, Namur: Presses Universitaires de Namur, 2005.

Lescure, Mathurin (ed.), *Journal et Memoires de Mathieu Marais*, Tome 1, Paris: Firmin Didot, 1863.

Leung, Cécile, *Etienne Fourmont (1683-1745): Oriental and Chinese Languages in Eighteenth-Century France*, Leuven: Leuven University Press, 2002.

Levy, Jim, " Joseph Amiot and Enlightenment Speculation on the Origin of Pythagorian Tuning in China", *Theoria* 4, 1989, pp. 63-88.

Lewis, Gwynne, "Henri-Leonard Bertin and the Fate of the Bourbon Monarchy: the 'Chinese Connection'", Malcolm Crook et al. (eds.), *Enlightenment and Revolution: Essays in Honour of Norman Hampson*, Aldershot: Ashgate, 2004, pp. 69-90.

Lewis, Gwynne, *Madame de Pompadour's Protégé: Henri Bertin and the Collapse of Bourbon Absolutism c.1750-1792*, Gloucester: Emlyn Publishing, 2011.

Lottes, Günther, "China in European Political Thought, 1750-1850", Thomas. H. C. Lee (ed.), *China and Europe: Images and Influences in Sixteenth to Eighteenth Centuries*, Hong Kong: Chinese

University Press, 1991.

Lundbaek, Knud, "Notes sur l' image du Néo-Confucianisme dans la littérature européenne du XVIIe à la fin du XIXe siècle", *Actes du IIIe colloque international de sinologie*, Paris: Les Belles Lettres, 1983, pp. 131-176.

Lundbaek, Knud, "The Image of Neo-Confucianism in *Confucius Sinarum Philosophus*", *Journal of History of Ideas*, 44(1), 1983, pp. 19-30.

Lundbaek, Knud, *The Traditional History of the Chinese Script*, Aarhus: Aarhus University Press, 1988.

Lundbæk, Knud, *Joseph de Premare (1666-1736), S. J.: Chinese Philology and Figurism*, Aarhus: Aarhus University Press, 1999.

Meadows, Thomas Taylor, *Translations from the Manchu*, Canton: Press of S.W. Williams, 1849.

Meynard, Thierry, *Confucius Sinarum Philosophus (1687): The first translation of the Confucian Classics*, Rome: Institutum historicum Societatis Iesu, 2011.

Mézin, Anne, *Les Consuls de France au siècle des lumières (1715-1792)*, Paris: Ministère des Affaires étrangères, 1998.

Milsy, Marie-Françoise, "Les souscripteurs de 'L'histoire générale de la China' du P. de Mailla", *Actes du IIe colloque international de sinologie*, Paris: Les Belles Lettres, 1980.

Mungello, David E., *Curious Land: Jesuit Accommodation and the Origins of Sinology*, Honolulu: University of Hawaii Press, 1989.

Mungello, David E., "European philosophical responses to non-European culture: China", Daniel Garber & Michael Ayers (eds.), *The Cambridge History of Seventeenth-Century Philosophy*, Cambridge University Press, 2003.

Mungello, David E., *The Great Encounter of China and the West, 1500–1800*, Lanham: Rowman and Littlefield, 2012.

Muri, Allison, *The Enlightenment Cyborg: A History of Communications and Control in the Human Machine, 1660-1830*, Toronto: University of Toronto Press, 2007.

Needham, Joseph, *Science and Civilization in China*, Vol. 5, Cambridge: Cambridge University Press, 1983.

Park, Nancy E., "Corruption in Eighteenth-Century China", *The Journal of Asian Studies* 56 (4), 1997, pp. 967-1005.

Pelliot, Paul, “Le véritable auteur des ‘Elementa linguae tartaricae’”, *T’ oung Pao*, 21, 1922, pp. 367-386.

Pfister, Louis, *Notices biographiques et bibliographiques sur les jésuites de l'ancienne mission de Chine 1552-1773*, 2 v., Chang-hai : Imprimerie de la Mission catholique, 1932-1934.

Picard, François, “Music: 17th and 18th Centuries”, in Nicolas Standaert (eds.), *Handbook of Christianity in China*, vol. 1 (635-1800), Leiden, Boston: Brill, 2001, pp. 851-860.

Picard, François, *La musique chinois*, Paris: Minerve, 1991. (Édition corrigée, augmenté et mise à jour, Paris: You-Feng, 2003.)

Picard, François, “Joseph-Marie Amiot, jésuite français à Pékin, et le cabinet de curiosités de Bertin”, *Musique, Images, Instruments*, 8, 2006, pp. 68-85.

Pinot, Virgile, *La Chine et la formation de l’ esprit philosophique en France (1640-1740)*, Paris: Libraire Orientaliste Paul Geuthner, 1932.

Pinot, Virgile, *Documents inédits relatifs à la connaissance de la Chine en France de 1685 à 1740*, Paris: Libraire Orientaliste Paul Geuthner, 1932.

Qian Zhongshu, “China in the English Literature of the Eighteenth Century”, Adrian Hsia (ed.), *The Vision of China in the English Literature of the Seventeenth and Eighteenth Century*, Hong Kong: Chinese University Press, 1998.

Rémusat, Abel, *Programme du cours de langue et de littérature chinoises et de tartare-mandchou*, Paris: Charles, 1815.

Rémusat, Abel, *Mémoire sur les livres chinois de la Bibliothèque du Roi et sur le plan du nouveau catalogue*, Paris: Imprimeur libraire, 1818.

Rémusat, Abel, *Recherches sur les langues tartares, ou Mémoires sur différens points de la grammaire et de la littérature des Mandchous, des Mongols, des Ouigurs et des Tibetains*, Paris: Imprimerie royale, 1820.

Rémusat, Abel, *Nouveaux mélanges asiatiques, ou recueil de morceaux de critique et de memoires*, 2, Paris: Libraire orientale de Dondey-Dupré, 1829.

Rule, Paul Anthony, *K'ung-tzu or Confucius? The Jesuit Interpretation of Confucianism*, Sydney: Allen and Unwin, 1986.

Rappaport, Rhoda, *When Geologists Were Historians, 1665-1750*, New York: Cornell University Press, 1997.

Simon, Renée (ed.), *Antoine Gaubil S.J., Correspondance de Pékin, 1722-1759*, Geneva: Librairie Droz, I970.

Song, Shun Ching, *Voltaire et la Chine*, Aix-en-Provence: Université de Provence, 1989.

Standaert, Nicolas (eds.), *Handbook of Christianity in China*, vol. 1 (635-1800), Leiden, Boston: Brill.

Standaert, Nicolas, "Jesuit accounts of Chinese history and chronology and their Chinese sources", *East Asian Science, Technology, and Medicine* 35, 2012, pp. 11-88.

Sutcliffe, Adam, *Judaism and Enlightenment*, Cambridge: Cambridge University Press, 2003.

Tchen, Ysia, *La musique chinoise en France au XVIIIe siècle*, Paris: Publications Orientalistes De France, 1974.

Thuillier, Jean, *Franz Anton Mesmer, ou, L'extase magnétique*, Paris : R. Laffont, c. 1988.

Van Kley, Edwin, "Europe's 'Discovery' of China and the Writing of World History", *The American Historical Review*, 76(2), 1971, pp. 358-385.

Van Kley, Edwin, "Chinese History in Seventeenth-Century European Reports", *Actes du IIIe colloque international de sinologie*, Paris : Les Belles Lettres, 1983.

Von Collani, Claudia, "Chinese Emperors in Martino Martini Sinicae historicae decas prima (1658), Adrian Hsia & Ruprecht Wimmer (Hrsg.), *Mission und Theater*, Regensburg: Schnell und Steiner, 2005.

Walker, Daniel Pickering, *Studies in Musical Science in the Late Renaissance*, Leiden: Brill, 1978.

Waley-Cohen, Joanna, "China and Western Technology in the Late Imperial Eighteenth Century", *The American Historical Review*, 98, 1993, pp. 1536-1537

Waley-Cohen, Joanna, *The Culture of War in China: Empire and the Military under the Qing Dynasty*, London: I. B. Tauris, 2006.

Waquet, Françoise, "Qu'est-ce que la République des Lettres ? Essai de sémantique historique", *Bibliothèque de l'école des chartes*, 147, 1989, pp. 473-502.

Wilcox, Donald J., *The Measure of Times Past: Pre-Newtonian Chronologies and the Rhetoric of Relative Time*, Chicago: The University of Chicago Press, 1987.

Witek, John, W., "Chinese Chronology: A Source of Sino-European Widening Horizons in the Eighteenth Century", *Actes du IIIe colloque international de sinology*, Paris : Les Belles Lettres, 1983.

（３）中文

安定洲「薬王的由来」『中国道教』、1995 年第 1 期、57-8 頁。

戴念祖『朱載堉——明代科学和芸術巨星』北京：人民出版社、1986 年。

戴念祖『天潢真人朱載堉』鄭州：大象出版社、2008 年。

方豪『中西交通史』上巻、上海：上海人民出版社、2008 年（初版は台北：中華文化出版事業委員会、1953-1954 年）。

馮文滋『中外音楽交流史』湖南：湖南教育出版社、1998 年。

耿昇「遣使会伝教士在華活動考述」『中西文化研究』20、2008 年、1-18 頁。

龔発達・肖玉編『聖蹟図』武漢：湖北教育出版社、1994 年。

韓琦・呉旻校注『熙朝崇正集・熙朝定案（外三種）』北京：中華書局、2006 年。

黄正謙『西学東漸之序章——明末清初耶蘇会史新論』香港：中華書局、2010 年。

李天綱『跨文化的詮釈——経学与神学的相遇』北京：星出版社、2007 年。

龍雲「銭徳明与『御製盛京賦』翻訳」『外交評論』93、2006 年。

龍雲「銭徳明之『孔子伝』創作意図分析」呉建民主編『学術前沿与学科発展——外交学院 2005 年科学週論文集』北京：世界知識出版社、2006 年。

龍雲「論伝教士銭徳明対中国音楽的接受」趙進軍主編『外交学院 2008 年科学週論文集』世界知識出版社、2009 年。

龍雲「従銭徳明与中国音楽的関係看其文化身分的変化」劉樹森編『基督教在中国——比較研究視角下的近現代中西文化交流』上海：上海人民出版社、2010 年。

孟華『伏爾泰与孔子』北京：新華出版社、1993 年。

明暁艶・魏揚波主編『歴史遺踪 ： 正福寺天主教墓地』北京：文物出版社、2007 年。

潘鳳娟「孝道、帝国文献与翻訳——法籍耶蘇会士韓国英与『孝経』」『編訳論叢』5(1)、2012 年、71-99 頁。

申庚「旧京理髪業」『北京工人』、1998 年第 7 期。

陶亜兵『明清間的中西音楽交流』北京：東方出版社、2001 年。

王冰「『律呂纂要』之研究」『故宮博物院院刊』102、2002 年第 4 期。

王国維『今本竹書紀年疏証』上海：倉聖明智大学、1916 年。

呉伯婭「従新出版的清代檔案看天主教伝華史」『清史論叢』2005 年号、118-145 頁。

呉軍「老剃頭匠的絶活——端打推拿」『文史博覧』、2012 年第 6 期。

呉莉葦『当諾亜方舟遭遇伏羲神農——啓蒙時代欧洲的中国上古史論争』北京：中国人民大学出版社、2005 年。

中国第一歴史檔案館編『乾隆朝上諭檔』全 18 冊、北京：檔案出版社、1991 年。

中国第一歴史檔案館編『中葡関係檔案史料匯編』全 2 冊、北京：中国檔案出版社、2002 年。

中国第一歴史檔案館編『清中前期西洋天主教在華活動檔案』全 4 冊、北京：中華書局、2003 年。

周美華「趙撝謙『六書本義』『六書説』述要」『中国文哲研究通訊』第 12 巻第 3 期、2002 年、175-200 頁。

（4）音声資料（CD）

Picard, François, Jean-Christophe Frisch, Ensemble Meihua Fleur de Prunus, Chœur du Centre Catholique Chinois de Paris, & XVIII-21 Musique des Lumières, *Joseph-Marie Amiot (1718-1793): Messe des Jésuites de Pékin*, France, 1998.

XVIII-21 Musique des Lumières, & Fleur de Prunus, *Chine: Jésuites & Courtisanes*, France, 1999.

Frisch, Jean-Christophe, Chœur du Beitang, & XVIII-21 Musique des Lumières, *Vêpres à la Vierge en Chine*, France, 2004.

博論の内容の要旨

16 世紀末、イエズス会は中国への宣教師の派遣を開始し、これらの在華イエズス会士が適応政策のもと精力的に進めた中国研究の成果は、17～18 世紀ヨーロッパで続々と出版され、知識人の関心を引きつけた。そして 19 世紀前半には、ヨーロッパで正式な学科としての中国学が創始される。従来の研究は、この 17～19 世紀ヨーロッパにおける中国研究を、もっぱら萌芽状態から完成へと至る直線的な過程として捉え、この間一貫して中国研究を牽引した在華イエズス会士における多元性や世代ごとの独自性については、ほとんど議論が見られない。そこで本論文では、特に研究の乏しい 18 世紀後半の在華イエズス会士に光をあて、彼らと同時代中国ならびにヨーロッパの各思潮との関わりが、いかにその中国研究に従来との連続と断続の両面をもたらしたのか、明らかにする。主な研究対象として、18 世紀後半の在華イエズス会士のうち、最も盛んに中国について報告したアミオ（Jean-Joseph-Marie Amiot, 1718-1793）に注目し、その膨大な著述のなかから特にアミオが熱心に論じた問題に関わるものを取り上げ、その思想に対する多角的分析を行った。

第一章「孔子像の創造と典礼論争」の内容は以下の通りである。18 世紀前半のヨーロッパには、17 世紀の在華イエズス会士の報告に基づく様々な著作が現れたが、その内容と受容状況には、しばしば典礼論争の激化が強く反映されている。典礼論争は、初期の在華イエズス会士が打ち出した、儒教経書における「天」や「上帝」を「天主（キリスト教の神）」と同一視する解釈や、中国人信者による天や祖先、孔子の祭祀を許容する宣教方針の是非を焦点とした。こうした論争性を回避するため、儒教や孔子に関する著作では、孔子を人間道徳の追求者として描き、儒教の世俗性を強調するなどの解釈上の操作がなされた。

以上の状況を経て、典礼論争が沈静を迎えた後、アミオ『孔子伝』（1786）が現れる。『孔子伝』は、もっぱら『孔子聖蹟図』や『聖門礼楽統』など、明清時代の中国で出版された孔子に関する文献に依拠して書かれ、また『孔子家語』なども部分的に用いられた。ところが、上掲の諸出版物における記述から大きく逸脱した、すなわちアミオが独自に付け加えた箇所がある。当該の箇所では孔子が上帝と天について論じ、天の祭祀とは目に見える蒼天に対する儀礼を通じた、不可視の創造者＝上帝への崇拝を表す祭りだと述べている。これにより、祭天儀礼は典礼論争において批判された如き偶像崇拝にはあたらず、さらに真の崇拝対象である上帝はキリスト教の神に等しいとほのめかしたのである。如上の解釈を通して、アミオは典礼論争におけるカトリック教会の決定に反論し、初期の在華イ

エズス会士が唱えた「天」・「上帝」＝「天主」説を再提示した。

第二章「中国音楽における科学（science）の発見」は、アミオの『古代および近代の中国音楽に関するメモワール』（1779）の分析を中心とする。18 世紀ヨーロッパでは、新しい科学の探究に対する気運が高まるなか、中国科学も盛んな議論の対象となった。多くのヨーロッパ知識人は、中国における道徳や政治の発達を認める一方で、科学、特に思弁的な科学に関しては停滞論を展開し、歴代の在華イエズス会士も、この見方を否定するには至らなかった。こうした状況において、アミオは古来中国で音律生成の基礎であった陰陽二気の相互生成理論、およびその象徴としての卦に、「科学のなかの科学」を見出そうと試みた。また、アミオは朱載堉『楽律全書』を主な参考文献としたが、中国科学の進歩を証明しようとするアミオの試みは、朱載堉による新しい音楽理論の探究とその広がりという、明清時代の中国における思潮とも深く関わっていたと考えられる。

第三章「メスメリズムと陰陽理論の邂逅」では、第二章に引き続き、18 世紀ヨーロッパにおける科学的探究と、中国の陰陽理論を結び付けるアミオの試みについて論じた。18 世紀末のヨーロッパに大きな反響を引き起こしたメスメリズムとの出会いは、アミオにとって、陰陽理論を従来の在華イエズス会士およびヨーロッパ知識人とは異なる仕方で捉える契機となった。アミオは、陰陽理論とメスメリズムの類似性を示し、陰陽理論に依拠してメスメリズムの有効性を証明しようと試みるにとどまらず、さらに陰陽理論が自然界探究のための理論としていかに有効かという問題へと向かっている。初期の在華イエズス会士は、中国の太極や理、陰陽の概念をキリスト教の神とは全く関わりの無いものと捉えた。これに対し 18 世紀前半の在華イエズス会士や、彼らと中国に関する文通を行ったライプニッツは、太極や理、陰陽をむしろ神そのものと捉えている。アミオの議論は、上記のいずれとも異なる側面を持つ。アミオは、太極などをあくまでも自然界に属する物質として捉えつつ、それらの上に神を接続した。つまりアミオは、従来の如く中国の陰陽理論がキリスト教の教義と調和可能か否かという問題に拘るのではなく、陰陽理論が科学としていかに有効か、いかに自然界の解明に寄与し得るのかという問題に焦点を移したと考えられる。

第四章「清朝の政治運営における公（public）の発見」では、アミオが大量の邸報に取材して記した、清朝の政治運営に関する報告を取り上げた。従来の在華イエズス会士と同じく、アミオもまず中国の最高権力者としての皇帝に注目し、乾隆帝の様々な振舞いについて詳細に伝えている。但しアミオは、皇帝のみならず清朝官僚の政治参与についても詳しく述べ、皇帝が最終的な裁決を下す前に必ず様々な官僚の意見を聞く姿を、しばしば「公

（publique）」や「公共善（bien public）」の概念を用いながら描いている。このように、アミオが清朝の政治運営を「公」や「公共善」と結び付けた背景には、当時ヨーロッパで中国政治を専制的とする見方が優勢だった状況がある。さらにフランス革命前の公衆、公論、公共性をめぐる議論の活発化も、アミオの報告に少なからぬ影響を与えたと考えられる。

第五章「文芸共和国における普遍語としての満洲語」では、アミオの満洲語論をめぐる言語文化的問題について論じた。清朝成立以降、在華イエズス会士は皇帝に対するヨーロッパ科学の進講を満洲語で行い、また『資治通鑑綱目』などの漢籍をヨーロッパ向けに翻訳する際、しばしば漢文より平易な満文版を参照したが、満洲語を漢語およびヨーロッパ諸語と同等に研究価値のある言語として示すことはなかった。これに対しアミオは、満洲語を、フランス語の如く「明晰な（clair）」言語であり、ヨーロッパ諸語と同等の精密さを持つ言語だと述べ、ヨーロッパの文芸共和国の「学者（savans）」にとって有用な研究対象として提示した。こうしたアミオの主張は、乾隆帝のもとで進められていた満洲語改革、およびその集大成としての『御製増訂清文鑑』（1771）の編纂事業に対する信頼によって強く促された。また 18 世紀ヨーロッパにおける、公共性に照らして有用であるものを追求する存在としての「学者」の理念も、満洲語をめぐるアミオの報告に強く反映されている。

第六章「清朝出版事業とアミオの中国史叙述」では、以下の内容について論じた。ヨーロッパでは 17 世紀以来、聖書に基づく「神聖な（sacrée）」歴史の補完物としての「世俗の（profane）」歴史に対する関心が高まるにつれ、中国史も大きな関心の対象となった。これに呼応し、在華イエズス会士は『資治通鑑』系統の書物を始めとする中国文献に依拠しつつ、また独自の要素を付け加えながら中国史叙述を行った。彼らは、公認されたウルガタ訳聖書ではなく、より古い時代に遡る七十人訳聖書に基づく年代法を採用した。また中国の歴史家が、史料の確実性に応じて中国史を神話時代、歴史時代、および両者の中間の時代に区分していると主張し、中国における歴史叙述の誠実さを強調した。さらに『書経』に記載された仲康日食の証明に努め、この日食が起こった紀元前 2155 年には、他の国々に先駆けて中国で正確な天文観察が行われ、高度な文明の発達が見られることを示した。

以上の要素は、アミオによる中国史叙述にも受け継がれたが、アミオ自身幾つかの新しい要素を付け加えている。従来在華イエズス会士が堯あるいは周威烈王を歴史時代の始点としたのに対し、アミオは清朝中期に編纂された『歴代三元甲子編年』に依拠し、黄帝を歴史時代の始点とした。そして七十人訳聖書の中でも、特に天地創造や大洪水の年代を早い時期に置くペズロン年代法を採用し、そのため従来より大幅に拡大された伏羲～黄帝の

間に、満文訳『御批資治通鑑綱目前編』に従って九氏を置いた。さらに従来の在華イエズス会士による中国史叙述に関して、中国文献の「本文」と「注釈」を混淆させ、また各文献の性質を適切に把握していないと批判した。アミオのいう「本文」とは、主に満文訳『御批前編』や『御製繙訳書経』など、清朝において編纂された欽定書の正文を指し、「注釈」とは従来の在華イエズス会士が多用した『綱鑑』などの通俗書を指す。

以上の六章を通して、アミオの中国研究が様々な点で従来の在華イエズス会士と大きく異なっており、その背景に同時代ヨーロッパにおける思潮、すなわち科学的探究や「公」をめぐる議論の活発化などがあることを明らかにした。第一章でみた如く、従来の在華イエズス会士と同様、中国文明とカトリックの調和は依然として重大な問題だったが、アミオは両者の調和をむしろ前提とし、ヨーロッパにおける如上の新しい思想上の動きに対する貢献という面において、中国文明の価値を追求したと考えられる。そこにはヨーロッパだけでなく、明清時代中国における思潮、特に清朝の正統思想からの強い影響も存在した。